山岸文庫蔵『傳聞和歌口決　三光院殿添削和歌』

解題・翻刻

奥田　勲
片岡伸江

本学山岸文庫には、『傳聞和歌口決　三光院殿添削和歌』と題する写本（同文庫分類番号一五六、享保年間書写）を蔵する。裏表紙に「昭和九年十一月上浣　岸廼舎」と署名があり、山岸氏が昭和九年に購った本であろう。本稿では、この写本を翻刻し、簡略な解題を付して紹介することとする。

Ⅰ　書誌

山岸文庫本『傳聞和歌口決　三光院殿添削和歌』は、縦一三・六糎、横一九・二糎の袋綴横本一冊。麻の葉繋ぎ文を銀で押した料紙（楮紙）にかきつばたの図柄を描いた表紙を有し、左端に「傳聞和歌口決　三光院殿添削和歌」と貼外題（輪繋ぎ七宝文料紙）がある。表紙右下、遊紙表右下、一丁表（以下丁付は墨付による）右下に「山岸文庫」の朱印がある。保存状態はきわめて良く、虫損も少ない。一丁表に元啓、広沢長孝、満存の三人による和歌三首と覚え書き一項が書き留められ、二丁表から本文が始まる。墨付八十五丁、『傳聞和歌口決』は一頁一五行書、一行は大略一五字程度、『三光院殿添削和歌』は一頁

一三行書、一行はほぼ一三字である。二三丁が書き損じのため次丁へとんでいる外は、めだつ乱丁、落丁はない。

Ⅱ　本文解題

〈1〉　傳聞和歌口決

『傳聞和歌口決』は、その名が示すように筆者元啓が学び聞いた和歌についての知識、学識を、備忘のため一つ書きで書き記した書である。山岸本では、追加も含め二丁表から二八丁裏までを占めている。管見に入る限り、他に伝本はない。

論の内容は、歌題や歌材、歌語の意味、詠歌方法や詠歌の心構え、会席作法等である。三光院三条西実枝、後十輪院中院通村、後水尾院、烏丸資慶、後渓雲院、三条西実教など故人の説、武者小路実陰、烏丸光栄ら当代歌人の説を順に書き留め、所々に自らの見解を併記している。この歌人の顔ぶれからもわかるように伝統的な二条派の歌学の知識集成の書である。ただ、細かい事項の一つ書きが多い中で、一一丁表から一四丁裏等には「万治御点」（万治二年五月一日～寛文二年四月七日）が終わる頃の当座御会に於ける後水尾院の和歌添削例があげられている。ここから和歌の実作を掲げ、具体的にどこが悪いかを詳細に記す元啓の地道な勉学方法の一端がうかがわれ、また、一首全体の言葉続きのなだらかな整合性を求めて大胆に改作する院の姿勢をも見出すことができる。

さらに、本論の部分は、享保十六年五月下旬、元啓が邀月精舎にて執筆との奥書を有するが、追加として（ほぼ同時期に記されたものであろう）署名のみ付された数項の抜き書き部分がある。これは、細川幽斎の『聞書全集』より「歌に必ず切る所有る事」と切り所のわかりにくい逍遥院詠についての元啓の覚え書き、『東野州聞書』から正徹の「乱世の声」と酷評された「ぬししらぬ入えのゆふへ人なくて蓑と棹とそ舟にのこれる」の歌と元啓の意見、吉備津宮の神詠「玉たれ

のみすのあみめの糸まてもなをきそ道の末は行けり」とを抜き出している。追加も元啓の勉学の源泉を示しているが、正徹について「哥は實をたてゝよむへきにこそ」、「正徹の風体一時堪能の名ありとも後世手本とはなるましき」と糾断する点、忠実な二条派の心情が露呈されており注目される。

筆者時中庵元啓は、『国書総目録』によれば『奉納和歌心の種』『和歌筒留哉留伝』という著書がある。二条派歌学を信奉し、松永貞徳の孫、広沢（望月）長孝と交際があった。

〈2〉　三光院殿添削和歌

『三光院殿添削和歌』は、二九丁表から始まる「五十首和歌天正五年於親王御方御出題同前」以下、最終丁までに及ぶ五つの歌集を総称する名称である。最初の二つの歌集が三条西実枝の合点、批評、注を有するため、便宜的に付けられたのであろう。末尾奥書（八四丁裏及び八五丁表）には「右者諸歌集より抜書早　諸歌集奥書曰　右之諸哥集者以飛鳥井干時宰相雅章卿本書寫之早尤可為證本者也　正保三年仲夏書之　享保十二年蔦月七日書寫終　時中庵　元啓　公迪（花押）」と書く。正保三年（一六四六）に某人が飛鳥井雅章所蔵本より写した「諸哥集」を、さらに元啓が享保三年（一七一八）に抜き書きしたわけである。『国書総目録』によれば、本書の祖本と思われる「三光院殿添削和歌」正保三年書写本が高知県立図書館に存在した。しかし、戦災で焼失し今はない。他には、高城功夫氏が、元啓書写本を宝暦十一年（一七六一）七月に小沢黄章（蘆庵）がさらに抜き書きした本を所蔵されている由である。(注1)

以下、順を追って、各歌集の説明を試みる。

①最初にある「五十首和歌天正五年於親王御方御出題同前」は、天正五年（一五七七）に誠仁親王家で開催された五十首和歌よりの抄出である。三光院三条西実枝による合点、注がついた五十首和歌自体は、続群書類従巻第四百に既に入っている。本抄出は、各題より万遍なく数首を選ぶという姿勢がうかがえるが、中でも特に合点、注のある和歌を選ぶ傾向にあり、三光

院の著作から歌学を学ぶ意図で写されたのであろう。実枝による批評は、同類和歌の指摘、俗語やふさわしくない言い廻しへの警告、現実の有様にそぐわない情景の訂正等である。なお、この抄出では途中題が欠落している部分（「春夕月」がない）が一箇所存在する。和歌の作者は、竹（誠仁親王）、道（聖護院准后道澄）、基（持明院従三位藤原基孝）、源中納言（庭田重通）、中山宰相中将（藤原親綱）、中院宰相中将（源通勝）、雅（飛鳥井雅敦）、積（積善院惟房卿息権僧正尊雅）、長（竹内長治）、為（冷泉為満）、永（高倉永孝）、元（五辻元仲）である。

②二番目の書は無題。四九丁裏より五七丁裏にわたる。奥書に「擬刻辰翁批語者六十九首　實枝上　天正五年六月二十二三日之頃御題被出之七月七八日之比各詠進清書親王行（ママ）方同十一日被仰合點事同十三日合點返納同月十七日申出同十九日一日所写校合早」とあり、天正五年六月に出された三十首題で七月七、八日に詠進した和歌。十三日に実枝が合点し返納したが、再度借り受け写した。全九十四首。和歌の作者は、正親町天皇、誠仁親王、中納言四辻公遠、左衛門督山科言経、源三位五辻為仲の五名。誠仁親王家五十首の場合同様、実枝による朱注が付される。

③続いて五八丁表より六九丁表までは「宝篋院殿百首」と称される百首歌である。奥書には「宝篋院殿百首御詠　康安二八二十六日被下之同二十九日加愚點令返進」とあり、康安二年（一三六二）八月の宝篋院殿足利義詮の詠で、頓阿の加点があるものである。この書については、高城功夫氏論文に詳しいが、本書によって、氏が頓阿の書き込みかとされた三ケ所の書き入れ注のうち、柳露と題された和歌「浅みとり糸よりかくる春雨にをきそふ露の玉のを柳」に付された「但玉緒柳先達被申旨候歟」が蘆庵本に新しく付け加えられた小沢蘆庵自身の覚え書きであったことがわかる。さらに、蘆庵本は「名所松　浦風はふきよはれとも住吉の松にそ浪のをとはのこれる」に付いた合点を書き落としていることも判明した。

④次に「詠三十首和歌　公條」と題された三十首和歌が、七〇丁表から七三丁表に写されている。全て地名を頭に冠した結題で、公條の家集としては最大規模である内閣文庫本『西三條称名院集』、伊藤敬氏所蔵『公条家集』『称名院家集』

におさめられている。永正一二年（一五一五）の詠の由である。(注2)

⑤最後に七四丁表から八五丁表に、永正四年六月廿五日冷泉政為出題の宮中月次歌がある。歌題は「春立つ日」から始まり、ほぼ四季、恋、雑と進むが、「となり」「うたかた」「つと」「あゐ」「かたこひ」等珍しい題が散見される。全百首、百題を、三条西実隆、同公條、伏見宮邦高親王、冷泉政為、同為広、中御門宣胤、同宣秀、三条実香、同実望、甘露寺元長、山科言継らが詠んでいる。

（注1）高城氏は、ご所蔵の『三光院殿添削和歌』の解題、及び「宝篋院殿百首」に的をしぼった翻刻、考察を左記の論文でされた。

高城功夫「足利義詮と『詠百首和歌』―〈付〉義詮『詠百首和歌』翻刻―」（『文学論藻』第五十九号、昭和六〇・二）

（注2）伊藤敬「公条家集について」（『苫小牧工業高等専門学校紀要』第2号、昭和四二・三）

Ⅲ　凡例

一、翻刻に当っては、おおむね通行の字体に依った。

一、丁は墨付を以て数え、丁移りは　」の記号で示し、表裏はオ又はウとカタカナで示した。

一、朱注は和歌の行間に記されていることが多いが、すべてその和歌の次に（朱注）として記した。

一、ミセケチ、訂正の類は原則として訂正した形で翻字し、何を訂したかは、注にまとめて記した。

一、肩点は墨書が殆んどであるので、朱書は特に区別しなかった。

一、翻刻に際し、東京大学大学院修士課程学生吉野朋美氏の協力を得た。

『傳聞和歌口決　三光院殿添削和歌』翻刻

送書恋　　元啓

文字消てかく跡うすき玉章もたへぬ涙のかゝるとをしれ

広沢長孝

紀の海の波につゝかぬ広沢も月のみなみに山の端もなし

花有遅速　　満存

日にむかふ麓はちりて山かけはやゝ咲そむるおそさくらかな

怨恋　恨恋　同し心也」（1オ）

伝聞和歌口決

一三光院殿御説

此さともゆふたちしけり浅ちふに露のすからぬ草のはもなし

まこと置たる露をよめり餘所の夕立をみかけて夕立のせぬ所にきくあまりに露のふかきを見てこのさとも夕立したるかとうたかふ心也夕立のあとには露のなき物なり雫をいふもの也

一同　船と出たる題にかち枕とはかり読てくるしからす数首あり水路花と出たる題舟をよ

まてはかなはさるなり

一歌の五文字に題をよむ事」（2オ）　殊外きらふ事なり自然よむ時はすゑの句大事也

一同　(墓)　偖恋の心は逢不會恋なり久恋は不逢恋也悔恋は後悔なりわろくよめは恋の本意ちかふ也

一同　歌に未勘国の名所同しくは不可讀とそ

一同　句を隔て句ひと香と読事不苦と也証歌あり　左之歌啓考出之

新古今　心あらはとはまし物を梅かゝの誰里よりか匂ひきつらん　俊頼

為家集　野も山も先咲梅の花の香にさなから匂ふ四方の春かせ

宝治百首　咲つゝくあまた梢の梅か香をひとつになして匂ふはる風　公明」（2ウ）

永徳御百首　いつの世のたか袖の香に橘のにほはゝいかに猶しのはまし　兼綱

拾玉集　藤はかま草の枕に匂ふなりたかぬきをける色香なるらん

新千載　咲にほふ菊のまかきの夕風に花の香やとす袖の白露　伏見院

啓案　大方は句を隔たり然とも後西院の御製に

詹蘆橘

見し夢の梅かゝとめて夏も又おなし軒はにほふ立花

法皇の勅に香と匂ひと自然には有へけれとも多くはなかるへしとそ

啓案　すくれたる歌ならは句をへたてゝ香と匂ひとよみても苦しかるましきをや等閑ならん哥には餘たる」（3オ）　可然歟

一同　雨そゝくとは水をそゝくことく雨の目にみゆるをいふ遠山なとには雨そゝくとはよむへからす雨おつるとは遠きにもいふへしふりくる事也

一同　古今真名序に詫其根ヲ於心地發其花於詞林者也是よみ方の口伝也

一同　過去のし文字上下の句に有事不苦自然歌合の時なとは可嫌也

一或人白梅の題に雪に読入たれは三光院殿御覧して是は白梅はかりに不限花にても卯花にても雪にまかふへけれはかやうに色〳〵かへ物のあるやうによむましきと」（3ウ）いさめ給ひし也かふりもふらぬやうにこれは白梅と聞ゆるやうに読へしと也

一聖護院宮道澄法親王の御詠に

すゝみつる水の水上さえまさり今朝は氷そむすひかへぬる

三光院殿御注に五文字は一首の巻頭清撰たるへく候是はあまり優美ならすとあり

同親王の御詠に

年毎の花にやはあらぬ咲といへはまたみぬはかりそふ色香かな（注1）

此評に同仰一字をもて一句を損し一句をもて一首を損すると申は此類也と注せらる」（4オ）

一くもれる夜は露のをかぬ由なり持明院中納言基孝卿夜虫といふ題にて

ふくる夜にたれを待てか降雨の露のまに〳〵なく虫の声

三光院殿評に露はをくも葉のふるも晴天の時に限るものなりくもれる夜は露のをく事なし是にて分別あるへきよし注し付らるゝ也

一同　祈恋に杜のしめ縄とはかりにては祈恋にならす為家卿の歌に

永き日の森のしめ縄くり返しあかすかたらふ郭公かな

杜のしめ縄と云は森の境目なと」（4ウ）にしめをはるゆへあなかち神分に限るへからすとそ

一そゝきかけてと云詞幽斎翁御詠

わかれこし今朝の涙をそゝきかけてならす硯の水茎のあと

同公そゝきかけて如此の詞風雅集の頃の躰か不庶幾由注し給ふ

一同　品経の歌のよみやう仏法を我身のうへのやうによむは悪き也よろつにたとへよむ也

一夏河に　散はてし桜の山のふもと川底の玉藻に花そのこれる実澄公玉もの花は夏なり

一同　雪　月　花　所に望ては何たる事も読なり例には成ましき也」（5オ）

雪月花万の物証歌なくては読間敷也

一同　読方口傳案する時は人丸貫之に肩をならふるとおもひて案すへし読出してからは孩児をも恐るゝなり

一さをなくるまと云事機を織時おさをあなたこなたへなくる事也鶯の梭をなくると云は早く枝移りする事也詩に多し又或人の歌に夏月易明

夏の夜は月のみふねも漕やらすさをなくるまに明るしのゝめ

かくよみて逍遙院殿へみせ申たり」（5ウ）しに舟のさほの様に皆人おもふ也紛れたる事とて難し給ひしと同公の御説也

一同　新樹の歌に常盤木のわかはのちると読たれは落葉は面白しされとも若葉を出して下

葉より常盤木はちるもの也と云々

一同　霞と霧とおなし様に心得ぬる也そとの間もへたつるは霧也霞はそのまゝにておほろにへたつるもの也少心かはるへし能々心を付へし霧樹ヲ行ヶハ相引子美行はいよ〳〵とおくなるの心也

一七夕と云題に星合の空天川鵲の橋三色を一首に読事中〳〵惣し」（6オ）　天川にても鵲の橋にても七夕の歌になる也能々分別可有也同公御説

一同　只見密器如不見深杭題にすかりぬれはさきへ心かゆきて是もとをわするゝもの也

一後十輪院殿御説　立春と云題にては元日の事を読也初春早春の題にては正月十日頃までの心よし又元日をよむもよし早春は元日から二日三日初春は五日六日を云也立春の歌は早春にはあふ也早春は立春にはあはす

一同　水郷は水辺川辺なとの里の体を可読宇治淀志賀なとよめはをのつから水郷になる也水郷」（6ウ）　里の沙汰なし

一同　暁帰雁に暁と出して又夢帰るね覚なと読事曲なし夢帰るも暁の事也ね覚も又同し又鴈の上にて今一声なとは如何夜の一声なとは尤欤又暁にさ夜は可然事欤

一同　朝と云題には朝朗　朝曙　明過て明暗なと可然也

一同　海上に浦とはかりよみ磯なとゝ読とも海と云字を読たるか能也

一同　関月月の詮をいはねとも関に月をよみ入れは関月面白き也

一同　賤なとの淋しきと読ぬもの也こちからおもひやりてはよむなり」（7オ）　其身にな

りてはいかゝ

一同　武士の身にていさむ心のなとゝよまぬもの也その身の上の事なれは也又公家なとは道の成かたき由を読也

一同　袖の湊に唐船よする。よむ事久しく浮沈したる恋の上にては可読袖のみなと袖のくつるなとも舊恋久年をふる恋なとにはよくかなふへし當座の恋には如何似合さるよし也

一同　閑中にしつかなるとよむましき也しつかなる心を用ていかにも感のあるやうによむへし

一同　寒気躰にさむきとよみ閑」（7ウ）　気躰にすこきとは曲なし但しそれも妙ならは外也

一同　題に本とする事を読す添物の躰になるやうによむ事傍題とて歌にならす雲雀と云題に雲霞花の匂ふ風なとは不苦霞といふ題に雲雀なと不可詠されと堪能の人は可読欤

一同　野径の題は野の道也但東路木曽路なとのやうなる大路にはあらす径と云はそとしたる野をわくる躰。草をわくる躰の道をよむへし

　堯恵云羈旅ノ間ニハ万里ノ道モ有ヘケレモ径ノ字ノ時ハ道ノ面影ハカリニテ可詠ト云々」（8オ）

一同　序歌はむつかしき物にて無心所着と云物になる也昔は多し今も捨へきにはあらす唯は有ましき也

一同　題を探りては能々題を工夫して題の心を我心にかまへて案すへし

一同　初時雨と云題に時雨不可詠時節ちかひ也初雁に初秋悪し暮秋も悪し帰雁には暮春尤

也鶯はいかにも初春可読年内にても立春あれは声を出すゆへなり又草木にも時節あり又月にも宵の間の月満月有明なと時節を能〻心得て読へし又降物にも露初霜時雨霰雨霙などい」（8ウ）つれも時節を不可達也

一同　俗なる詞よく思慮あるへき也是肝要なり

一同　月の題に有明よむ事悪し夕月夜はせめてなり

一同　かりかねといひて声といへり一首の内に古歌にはあれとも近来は不詠也雁かねは雁のね也

一同　字あまり秀歌には難なしさなく無用なり

一同　逢不会恋絶恋とちらへも也

一同　人のしらぬ事をよむ悪し下手なる事也

一同　唯歌は以レ直為ニ根本一也すなほにて面白き事なき也今時の」（9オ）　わかき衆は人の歌の枝葉におもしろき事有をみて根本のすなほなる所をしらすして枝葉はかりを哥と覚へて学ふによりて根本の理をうしなひ野へのくすかつらのやうにあらぬ所にはひまとはるゝ也努〳〵根本の正直を離れぬやうに可心得事なりとそ

一同　惣而歌は趣向あれは一首しゆひしかぬるもの也趣向もなきは一首先首尾するもの也一首首尾すれとも句にちからなくぬるくなる也又趣向あれは句かあしくこはくなる也其句の力ぬるくなるをは力をいれてぬるくならぬやうに心を」（9ウ）　入る其境肝心なりとそ

啓案　六百番歌合　顕昭　隆信　寄商人恋俊成卿判云大方は歌の道心をいひとらんとする哥

は詞としらす詞を思ふ哥は心たしかならすすかたをしれる哥は常に題をそらすさたまれるならひなりとそ

又風雅集序に云品たかゝらんとすれは其心たらす詞こまやかなれは其様いやし艶なるはたはれやすくつよきはなつかしからすと云々

一同　歌を詠して五七五七々を置かへ〳〵返々吟し詞の似合しき様に置なをすへし吟聲舌にかゝる詞はなをすへし詞調り候て」（10オ）　五十度も百度も早く遅く吟して見るへし是第一の伝授なり歌はいかにも打むきて理の能聞えする〳〵とかとなく詞を尋常に可読初心のときひとかと読とて無用の事を心にいれて詞をたくむ事ゆめ〳〵有へからす

一同公の歌に野虫

おなし野ゝ尾花か袖やまねくらん人まつ虫に心あはせて

此詠あしき由にておなし野ゝ尾花か袖や松虫に心あはせて人まねくらん如此改らるゝ也

利口過為廣卿なとの風にてあしき由也

一同　詞をもとめて心をつくるは下品也」（10ウ）　心によせて詞をかさり求むへし

一同　百首の哥におなし物二首心かはれは読なり三首はよます

一同　女郎花とよみて一首のうちに花と又よむくるしからさる也

一同　関は名をさしてよむ習也

一後水尾法皇勅

夢逢恋　　資慶卿

覚にけりさらは五十の夢ならてあはれ逢みし程のはかなさ

勅に先哥は珍重也されとも二三の句さらは五十の夢ならてと云語路は四五の句のあはれ逢みし程のはかなさとおなし様也如此語路の同し様にならふを歌によろしからさる」（11オ）事にする也下句あひ見し程の命はかなきとあれは語路かはりてよきよし扨後日に御添削ありて

逢とみはせめて五十のそれならて何中〳〵の夢そはかなき

一同勅に同字にはを等の字さはると障らさる事三の句の下弐にの字有て四の句にの字ある事也軽重あれはさはらすいつれもおもくいつれも軽けれはさはる也軽重あれは不碍由勅之旨伯三位通茂卿へ被仰旱とそ

一同　寛文二年二月十二日御當座御会

野花　　弘資卿餘分也

尋きて思ふも幾世いく春を」（11ウ）　ふる野〻の花（ママ）のふかぬ色香に

此とまり留り申様にも存いまた留りにくき様にも存候依而窺申勅（注2）は。を。さら也惣してをはと云所はにかよき也乍去所によりてにはと云所をはと云所も有也五月雨にはと云所を五月雨はとする様の所有也とそ

一同　二月十七日御當座

海邊月　　資慶卿

見ぬ月もねぬよの床の浦人や浪のよる〳〵もしほくむらん（注3）

ねぬ夜の床と二の句御添削あるによりて四の句浪のよる〳〵と御直しなり本の儘にてすむ月にねら」（12オ）　れぬとあれは浪のよるさへにても能なり二の句にねられぬはせはしき也四の句に浪のよる〳〵とのひたるかよき也ねられぬ床はのひたる句也其時は浪のよるさへと四の句つまりてもくるしからすの由勅也右又御添削ありて　月ゆへにねすしもあらぬ床の浦のあまもよる〳〵もしほくむらん如此可然也月見ぬ床の浦よりは句やはらかにて可然由也勅也後に又勅に云月ゆへにとはかりにては不足也月故はにてにはの心に聞ゆる也月ゆへにとは不足なりとのよし勅なり

一同勅　雨降すさむとふりすさむとはやむ事雨すさむとは降事と」（12ウ）　いへとも哥にてはたゝ降すさむといへは降事也侵と云字心に法外の心也

一同　四月十二日新院御会の時法皇勅さすかと云詞は三重にかゝる詞也さうあるへき事のさうなくて又さうあることを云なりとそ

一同勅　御添削　難忘恋　後西院御製

いかなれはうきおもかけのとまるらん見しは見しにもあらぬちきりに（注4）

いかなれは何と同心の事にてはなけれとも此やうなる字二つは置ぬ事なり

一同勅　六月祓　通茂卿

みそきして河せに流す桜麻のおしまぬ夏も終にくれぬる」（13オ）

おしむにも暮たるは順也おしまぬ夏もくれたるは逆也仍聞にくしねちれたる也夜のなかきと云所へ明やうなとつかへはねちれたる也

一同　御添削　垣根槿　　日野前大納言

〻あさかほのしほるゝもおし日影まつ垣ほの露にあたくらへして（注5）

きゆるいかゝ又槿ならは垣ねより垣ほ可然候欤

一同勅　新院御所御當座

古渓花　　通茂卿

〻咲花もさなから谷の埋木になしてとはれぬ春やふりぬる

右の哥に付て勅此五十年以前にて御若年廿七八斗時被遊候」（13ウ）

御製　初雪

積れなをおしまん草のひと花もあらはこそあらめ今朝の初雪

と被遊候而御読合候へは御製出来申候乍去難ゝ有〻の由也三句より四句へ如此かけたるは

嫌ひ申事の由被申候によりて御一代の間終に三句より四句へ仰かけられたる御製あそはさ

れさるのよし勅也

田家花　　源大納言通純

いつかくて春に心をつくるともみへぬ門田に咲花はおし

右歌も三の句へつくるともみへぬとつゝきたれは悪しく可有御座哉のよし源大納言被窺候

所是は不苦」（14オ）の由勅也埋木になしてとあるとつくるともみへぬとあるはかはりた

る様に聞ゆるか連〻可吟味也

一資慶卿曰（注6）句の吟味のひたる句はかりつゝけたるは詠しほなく長くなりせはしき

句のつゝきたるは哥くたけてせはし尤可有吟味鍛錬也

新院御會に七條羽林の詠

法皇の御沙汰に　山家鳥と云題にて

〻庵ちかみ松ふくあらし鳥のこゑ都にかはる山のおくかな

右を松吹嵐鳥のこゑとあらは都にも似ぬと四の句あるへし又四の句都にかはるとあらは二三の句松のあらしも鳥の音もとあるへしと也」（14ウ）

一雅喬王語日　法皇勅に歌の面かけにてよむと云有本哥の心を取たるにてもなく又詞をもとらす心をぬすみたるにてもなくおもかけにてよむは不苦のよし

一弘資卿云歌を案するに初一念の上にて案するはわろし初一念を捨て案しかふれはよき趣向有物也

一後渓雲院殿説　哥を案するに黒き物を黄にかふるまて案して読へし案すれは又趣向有もの也

一同　地下の歌には多く意念より読ゆへ道に不叶惣して歌は情よりよみ出すか道の正体也此次而に」（15オ）

法皇御徒移の時

池水久澄　後西院御製

幾千代そ絶ぬなかれをせき入て行末遠くすめる池水

同題同時　飛鳥井雅直

行末の絶ぬなかれをせき入ていく千代遠くすめる池水

法皇勅に同事なから雅直哥意念の上にて是にて能と思ひて置故歌おとれり意念とは初一念也此初一念をはなれて能〻沈思すへしと也此趣毎月抄見合すへし

一同歌を案する稽古とて打宅雲泉へ被仰つる御歌

秋旅　　通茂公」（15ウ）

一〻片敷もあかぬ花野〻かり枕月にや秋の旅ね忘れん

二　片敷も露の花の〻かり枕月にや秋の旅ね忘れん

三〻月にしく露の花野〻かり枕夢こそまたね旅ね忘れん

四清撰　月にしく花野〻露のかり枕夢こそまたね旅ね忘れん

一同　詞のあつかひおもからぬやうにかろくつゝくへしたとへは定家卿

故郷を出しにまさる涙かな嵐のまくら夢にわかれて

嵐の枕なと云様の事也松井幸隆哥に

〻打そよくおとにも夢は覚ぬへし」（16オ）　さゝの枕に嵐ふくなり

篠の枕にといへるか一首の内にて詞おもし小笹の枕とすれは軽き也と御直しなり

一同　関月　　定基卿

〻晴て見はさそな清見か関の戸の（注7）月にはゆるせ夜半の秋霧

此哥関ならんとにては下句につゝきかたしとて御添削也此味ひ肝要なり其上関ならんはいひつめてわろしさそな清見といひてよく聞えたりとそ

一同　二條家のならひ五尺の菖蒲に水をそゝきたる様によめとをしふるそれは心すくにやすらかに句作」（16ウ）　のひやかに奇麗に涼しくよむ事なり詠歌大概の躰或俊成家隆為家頓阿なと句つゝきの様を心にかくへし松井幸隆哥に

〱いつれをか先折とらん朝露に色〳〵にほふませのなてしこ

此ませのなてしこつゝきわろしませの内ませゆふなとゝはよむへしとそ

一同　てにをはにておほくくさりつゝくれは歌おもし是大秘事也

一同　貫之歌

〱さくら花咲にけらしも足曳の山のかひよりみゆるしら雲

又俊頼歌」（17オ）

〱山さくら咲そめしより久かたの雲井にみゆる滝のしら糸

俊頼哥はたくみなる所有ておもしろしさる程に此哥説〻多し貫之哥は聞えたる通にてしかも晴の歌の躰也たくみに面白き程か俊頼の哥の位おとりたると也

一同　御弟野宮定基卿哥に

〱秋そとは露をく袖にしる物を我のみしると荻の音する

此第三句後撰時代の詞にて悪し四の句も何とやらんおもくれてわろしと也

一同　歌を吟するに文字移りの所ははつきと句をきらぬやうに吟するか習也」（17ウ）

一同　萬葉後撰は用捨の詞多し拾遺は用捨すくなし古今はいつれの詞も大方用ゆへし

一同　哀傷の歌は哀傷には本歌にとるへし其外には悪し

一同　光と影と一首の内によむ也源氏に月は有明にて光おさまれる物から影さやかにみえてと有

一中〳〵の詞は還て也と御説

一同　はしたものとは上藹にもあらす下藹にもあらす中半のものといふ心也とそ

一同　詠草短尺懐紙なとに　俤　凩　衞　なと書類の文字書へからすと也」（18オ）

一同　寄海恋　　通茂卿

〳〵うとくのみ人は心をおくの海によせんかたなき浪のすて舟

此御哥下句御吟味の上くあひあしきとてよせてはたゝにかへる浪かなかやうに御直し意味も深く上下とくと首尾したると仰也

一同　我は廿六七歳の比まて三條西実教に付て勤む自分不器用にて有し故殊之外骨を折し也さるほとに下手の哥をみても哥はよみかたき物なるに是程には奇特と思ひて添削する也下手の師には我ことくなるかよきなり院には天性御堪能なれは御勤はなけれ」（18ウ）　とも御秀哥まゝ多しさる程に人の哥を御覧せられても叡慮に叶ひかたし下手の師には中〳〵あしき也とそ又後水尾院の御製と院の御歌とはよほとの間のある也後水尾帝は天性御堪能のうへに通村に御稽古御修行有し也

一実業卿説　正花は一輪咲ても面白し作り花は何ほと大きに卓山にても面白からぬことく哥の詞も花をもうけて詠たるは面白からぬ事也地下の者の哥のいきかたなりとそ

一同　堂上地下の歌邪正よくわかること有左の歌をもて能々」（19オ）　工夫すへし

夏野　　逍遙院

〻露かはく夏の〻草のうらかれてあつき日かけや秋のはつ霜

同題にて　　長孝廣沢隠士

〻面かけは霜のかれはにしほる也てる日や寒き野辺の夏草

右てる日や寒きといへる俳諧也其上一首の趣粗也正道にしてかける事なり（注8）かたき故此いきかた也逍遙院のは正道よりかけりて其趣精也同し題にておなし趣向なれは是にて能しる〻也

一同　毎月抄を能翫味すへしとそ

一同　ふのぬ一首に二所有ても不苦也

早ぬはふたつ有を嫌ふ也」（19ウ）

一同　同字句をへたてすしては不苦

一同　和哥の会席へ何にても出さぬ作法也尤書物なとも持ぬ也公宴に若き衆は御次へ立て抄物なと見給ふと也詠草の下書も反古の様に書ちらす事は狼籍なりとそ又云かさね硯は中古以来より用ひ来る也古は硯一面を席中に用ひたるとなりそれゆへ硯一面を我前にひさしくとむる事を恥にしたる也

一実陰卿　似雲法師へ仰らる〻はふりのかはるといふは風情のかはる也」（20オ）

風情のかはるといふ事しるものすくなき由度々仰也ふりかはりてめつらしくなるは歌の心あたらしくなるよし也似雲発句申上られ候時ふりの仰有

〻百草も霜の花さく枯野かな

是を

〻枯野には霜の花さく草もなし

かやうにふりをかへる事也と也又この発句にて色〳〵ふりかはるへき由〻百種も霜の花さく枯野かなといへはふるめかしき也此分にしてをく故也ひた物案しかふる事也歌も其ことくふりを案し〳〵てかふる也」（20ウ）

一同御説　趣向は案してよし句は唱へて行内に宜き事出くる也一句〳〵の向一首のむき次に詞のむき有事也

一同　とふしてもてにをはなき哥は歌から悪しく味はい悪しき也つゝきにて語路悪く聞ゆる也句移り又字移り心にかくへしとそ

一同　歌のあしきをはそが〳〵すると度〻仰也愛宕大善院恵通の歌上句は御失念の由何とやらしてはらふ清き川原にとありたる也此はらふ清きあしき也はらふ嵐のかたはまたしも也是か字移りの悪しき由也句移りよきと云は中御門宣誠の歌」（21オ）

郭公一聲

〻いつしかとまたれしよりも郭公心つくしの夜半の一こゑ

一同　えならぬと云詞うき草のおほく云詞也えならぬ所有なりとそ

一似雲或時　実陰卿へ申上られけるは此ころいかに仕候間も歌よめ不申趣向も詞もつゝきかね申候いかゝ仕たることに候哉と申さる仰になるほと左様の事有もの也其時は歌をよむ

へからす一月も二月も打捨置て其内に古集とものよきをひた物見て哥をよまんと思ふ心をはなれて古哥に心をそむれは自然と哥よまるゝ物也との仰似雲予に物」（21ウ）　かたり也

一同　新後撰見てよし

一公野卿は續拾遺たけ高くよろしき物也平生見たる能由哥大はになる手本なりとそ

一同御説　〻意　〻風情　〻詞

意は趣向也先第一に趣向を詮議して扨風情をおもひめくらし上を下へ下を上へしてなをし〳〵色ゝと風情を思ふへし此ふたつを消して後言はの吟味也此吟味を哥ことにわするへからす大切にすへしとそ

一光栄卿のたまふ初五文字に中〳〵と置事此方とも今ゑ（ママ）おかぬなりいかにせんはまたもをくへき」（22オ）

となり此つきに心なきと云事実陰卿心ある和哥のうら人と近比の哥にあり是は下に心なきと云事也其歌

〻心ある和哥のうら人いかゝ見む入江は春の浪かすむとも

此説享保十一のとし也

一同　政豊松井一学哥御点の節

落葉　政豊

〻木のもとにつもるとみるも誘ひつゝ行ゑさためぬ風の紅葉ゝ

つゝ中に候言つゝはかるし是も誘はれてと聞ゆると仰也とまりは大事にするそと也」（22ウ）

一同　落葉　　同人詠

〱惜めともわれ(朱)あたにとちり行もみちはをいかて葉もりの神もとゝめぬ（注9）

もみち葉と同字」（23オ）

（23ウ白紙）

一同　落葉　　同人詠

〱惜めともわれ(朱)あたにとちり行くもみち葉をいかて葉守の神もとゝめぬ（注10）

もみち葉と葉守と同字の窺申右のことく御直しの上不苦月やあらぬ春や昔の春ならぬと云様と同き也間にいかにと入てもくるしからすと也

一同　歳暮　　同人詠

一とせのなこりと惜むけふの日も山のはちかく暮て行そら

此哥躰をうこく趣向と也春秋のわかれにはいはるゝ故なり

一同　山雪　　同人詠

花の色月の光もおもかけにたつみよしのゝ山のしら雪

雪の題に花の名所をいへは花か詮になる也雪月花の趣向はいはるゝ事也

右一策為備遺忘筆採干邀月精舎

享保十六年五月上旬　　元啓」（24ウ）

追加

一細川玄旨翁の説に云哥にきるゝ所か一所有へし二所にてきるゝはわろきなり第一にてきるゝ歌

〱消わひぬ。うつろふ人の秋の色に身をこからしの森の下露

第二の句にて切たる哥

〱夢にてもみゆらん物か。歎つゝうちぬるよひの袖のけしきは

第五までの事かやうの事也第五にて切ると云は吹なかす哉なとの詠様なるへし可様の事能々習ひしらるへき也

啓案に右両首はきれ所」（25オ）　はき〳〵と聞ゆる也切所きこえかたき（注11）有逍遙院の御哥に尋花

たのめとやなさけなけなる山寺は花にあやしきしるへなからも

右の歌頼めとやなさけなけなるこゝにて切て聞へきとなさけなけなる山寺とつゝけてきるは聞えかたからん其上さやうに聞ては道理こまやかなるへからす案に右の歌の心山寺は花の案内を能しりてあやしきほとのしるへなれとも此方より花の在所をねんころに尋ぬうちは（注12）山寺か方よりはおしへましきとて欤なさけなき」（25ウ）　教ふりをして居るは此方より花の在所をとはせんとて情なけにするにての心なるへし第二の句にて切て山寺より聞はしむれは聞よきなるへし是を詞のつゝきからにしたかはて第三の山寺まてへつゝけては聞えかたからん欤

一東野州へ堯孝物語り

〻白妙の夕附鳥もうつもれてわくる梢の雪になくなり
是は頓阿哥也風雅集御自撰の時此哥を御直て雪や鳴らんとして此集にいれらるへき由仰下さる御返事に申様左様に直して此哥」（26オ）を入らるへきにひ候はゝひらに御免あるへき由かたく申上て別の哥入て是はいれす道は如此と物かたり有けにも雪や鳴らんは實なき所なりとそ
一徹書記の哥に
〻ぬししらぬ入えのゆふへ人なくて蓑と棹とそ舟にのこれる
畠山仙空のみ更にうらやましくもなき哥也ぬしまてのけしき有けるとそ是等や乱世の聲にも侍へき是は私の存所也あやまりにやいかゝと云々
一家隆卿の息祐隆きひつ宮に」（26ウ）参詣して百首有りしに神子に詫して御返歌あり
〻玉たれのみすのあみめの糸まてもなをきそ道の末は行けり（注13）
吉備津宮の御作也此道は申ても心にまかすへきにしもあらすとそ是野州の説なり
啓謹て懇を顧す故にこれを申正徹のぬししらぬ入えの夕人なくての哥仙空のなけかれたる尤なるへし都て哥は實をたてゝよむへきにこそ正徹の哥もおもしろからんとたくみてよめる故なるへし古今の序に心に」（27オ）おもふことをみる物きく物につけていゝ出せると云事哥の土代眼目なるへし歌は淳朴篤実の心なくては是神も納受なかるへし文花の過分せは實はうすかるへしさりとて花には黄玉葉には青玉又富士の山おなしすかたにみゆる哉あなたおもてもこなたおもてもにてもあるましき也文花はかりにても人感しか

たし真実の心こまやかにして文花ともに調りたる歌は人感すへし人感して後天地鬼神も」（27ウ）感すへしその故は万葉の時代の天地今の世の天地もかはる事なしされはとて万葉時代のこは〳〵しき風躰に當時よみたらんにたれ有て感する人もあるまし天地鬼神のみ万葉の風躰を感すへしやは柿本の神詠山邊の聖跡は万葉の頃千歳の今も風体は今古に通せりと見えたり実有て言詞とゝのはは今の哥といふとも古にもかよひ末の世にもおよふへし正徹の風体一時堪能の名ありとも後世手本とはなるましき」（28オ）事と曾て此道しらぬ身にさへ思ひやられ侍るにそ

邀月精舎

元啓」（28ウ）

三光院殿添削和歌

五十首和歌天正五年於親王御方御出題同前

春十首

早春

いつの間に春はきぬらん白雪もまたふるとしのみよしのゝ山　長治

（朱注）新続古今巻頭類―候哉

出る日ものとかになりぬ雪の山きえまあらはす春やきぬらん　永孝

（朱注）つくられたる雪の山ならはきえ間の間の字不審に候

竹鶯

夏冬もかくれてやとれ千尋ある竹のそのふの春のうくひす　雅敦

（朱注）近歌に同類あるやうに存候

〱竹のそのふになれてもきかん一ふしに千世をもちきれ鶯の声　竹無品誠―親王

〱なれもたゝかしこき跡やしたふらん」（29オ）竹の林にきぬるうくひす　親綱

〱鶯のねくらの竹は春の色もありとやこゝにあさな〳〵なく　聖護院准后道澄

江上霞

〱小船こく入江の水の煙さへ春はかすみにたちかはるらん　高綱

ほのかにも霞にこめてみしま江や夕の浪にうつるともふね　永孝

（朱注）京極中納言みるめなきさ同類

〱難波かた入江の浪のみつ塩にくもるとみしやかすみ成らん　竹

難波江や空は霞のたちこめてみぬ夕浪の音をきくかな　基

（朱注）雲は霞の立こめたるよしは波の見えさらんこといかゝ

なには江や夕日の浪に風たえて霞そわたる芦のむら立　道

（朱注）芦のむら立を霞の渡へきこと不得本意霧ならはかやうにも申へく候」（29ウ）

もえ出る芦分小船さはらねと霞をたとる難波江の春　通勝

（朱注）萌出る頃の芦に舟のわくへきことはりなし

雪中梅

降つもる雪のうちにも匂ひ来て風のしらする梅のはつ花　基

（朱注）第四の句同類候哉

色にしもまかふのみかは梅かえの雪や雫（の雫欠）も香に匂ふらん　道

かつきゆるたえまに花の色みえ（わか）て雪に咲つく軒の梅かえ　通

〱あは雪もきえ残る色のそのまゝに匂ひくはゝる梅のしたかせ　竹

〱ふるほとは雪ともみしかつもりての枝はみなからにほふ梅かゝ　雅

つもりあへぬ木の間の雪を吹立て」（30オ）　梅かゝしめる袖の朝かせ　元仲

（朱注）雪に梅のにほひは残すましく候

〱咲枝の雪に色こそ埋むとも香やはかくるゝ梅の下かせ　尊雅

けぬかうへに又降そふも咲梅の香をは埋ぬ春の雪かな

（朱注）埋残鐘一声の句法候哉

岸柳

〱風わたる岸の下水そこひなき渕さへさはく青柳のかけ　雅

〱われも又わする（春の色を欠）草の種ならて岸に生てふ青柳のかけ　竹

〱かけひたす水のみとりは枝をそめ浪をそめたる岸の青柳　通

〱陰ふかく（みえて）岸に生てふ青柳の枝はさそはぬ浪のうき草　永」（30ウ）

〱春はたゝかすむ朝気といひ置し人やみさりし月の夕かけ　道

暮るより霞む光の色そひてみゆる高ねや月になるらん　元

（朱注）こしの五文字より下の句いひかけたるは好まぬ躰に候下の句を引はなちて吹□何事やらんときこえ候

待えても霞のひまの夕月夜ありとはかりのなかめならまし　竹

（朱注）此哥は有明にても夕月夜とは詞にあらはしても夕と覚しき会釈と聞えす候此義は題ことに渡るなへて結句もたかふ様に哉

とりとめぬ影そあやしき行月の夕はかすむひまはあれとも　永

（朱注）霞のひまあらはとりとめぬ月の不審あるへきにあらす

〻はらふにも終にかすみてことはりの春にまけぬる月のゆふ風　親

〻暮やらてうすき光とみる月に夕やかすむとかもかくれん　通

〻半空もおもひやらるゝ夕かなかねてうつめる山のはの月　尊」（31オ）

山のはは暮あへぬまに出てたに霞を出ぬ月そわりなき　雅

老の波こえぬ物から春といへは夕はなにとおほろよの月　為

（朱注）おほろ月には可然をかやうにいひかへてはをとりに聞え候

帰雁

〻故郷の心もしらて行かりやうはの空なる音をも鳴らん　通

（朱注）惣別源氏物語の哥は本哥のことくに候

今はとて秋こし雁のかへり行とこよの里は春なかるらし　聖

（朱注）雁は春を嫌よしに候欤

〻行空に契やふかきとふ雁の帰る雲路にはねをかはして　雅
あま人のひく玉琴のことちてふみえてかすみにかへる雁かね　持
（朱注）天人はあま人をよみ候やらん於哥はまた不分明候」（31ウ）

初花

うつし植し花も南の枝よりや先春をしる色をみすらん（注14）
（朱注）南枝のさた梅と覚え候古今の花の香をの哥は梅を申候
なへて咲比とて世にもあかれしをましてとむかふ初さくら哉　中
（朱注）花の字あまり候
〻うへ置し一木かうへの春やとき花もおくれぬ色をみすらん　源元仲
（朱注）一字を以て一句を損し一句を以て一首を損すると申は此題にて候欤
〻年毎の花にやはあらぬ咲といへはまたみぬはかりなとめつらしき　聖護院准后
吉野山このめも春とみしまにそほとなく花もほころひにけり　為
（朱注）下句同類
〻冬に先心そにほふ咲初しこすゑは花の一木はかりも　右衛門督
〻咲初し一木なからもみし人の」（32オ）ことはの花や四方にみつらん　竹
〻わきてみる色香もふかしあるか中に春しりそむる花の一木　永

花埋路

〻ふみ分てとはぬもつらしとふ人にはらふもおしき花の白雪　竹

いとゝ猶ふかきよし野の通ひ路をちりしく花にまよふ山ふみ（あとや絶なん欤）　積

もろ人もゆきあへぬまて散つもる花を山路のせき寺にして　永

〱みよし野や奥まて道も絶やせん花を尽して山かせそふく　中山宰相中将

〱道（山欤）とをき春のしをりのうつもれて帰るさたとる花のしら雪　源元仲」（32ウ）

今はとやなれもしたふやかへるさの道ふりかくす花のしら雪　兵

（朱注）為家卿は草木を花のこと詠し候ことをさへ難を加へ候けるなれは花を申へきはよろしからす候欤

〱ふみ分てとひこぬ人の心こそおもへはふかき花の白雪　聖護院准后

〱ちるからに人もとひこぬ通ひ路はいかなる跡か花にいとはん　中院宰相中将

雲雀

〱子をおもふ道は雉子におとらしとすをはなれても鳴ひはり哉　中山宰相中将

〱春の野のしけき往来に半天を床とさためてなく雲雀かな　右衛門督

朝夕におなし雲井をとひあかる野へのひはりの床そかくれぬ　積

（朱注）第三の句俗語候欤

かきりなくあかるとみれは白雲に」（33オ）　はねうちかはす夕ひはり哉　竹

（朱注）羽うちかはすは雲雀に不相応鵬鷃の差別候へき欤

新樹

〱今よりの人ならすへき宿ならし涼しくしける柏木のかけ　中院宰相中将

〻常盤木の色とは何をわかみとりおなし梢にしける夏かな（こゑ欠）　同

〻夏きてはうすき袂の一重山何と青葉のかけしけるらん　竹

〻花咲はかたはらに見し深山木もなへて（ひとつ欠）若葉のふかき色かな　右衛門督

〻咲のこる桜か枝の春の色にならふ紅葉を若葉にそみる　永孝朝臣

〻常盤木もなをしけるらん夏山の葉分の風のもるひまそなき　長治朝臣」（33ウ）

郭公　聖護院准后

〻郭公いつはありともわするなよひのむら雨月のあかつき　中院宰相中将

〻つれなきも人にくからぬ郭公またこりすまの心つくさん　竹

〻忍ひねは木の間もしらぬ雲路にも心つくしのほとゝきすかな

（朱注）めつらしき木の間の郭公は面白候

山彦になれもこたへて一声の後もまたなくほとゝきす哉　永孝朝臣

盧橘　積

〻一本を風のさそへる（ゆかり欠）庭の面の草はらなからにほふたちはな　竹」（34オ）

橘のかほる軒はにかけふけてまつもむかしの友とやはみん　永孝朝臣

〻たか袖をしる人にして橘の花はむかしもなを（おとろかすらん）句ふらん　中

道も今昔にかへるうれしさを花たちはなの香に余るらん

（朱注）かけふむさたなくてみちと云事橘により来候す候欠

夏草

〱あれやすき物とはしれと八重葎あまりなるまてしける庭哉　永孝
〱とひよらむ道もやいつく生そふをそのまゝかこふ庭の夏草　源中納言
〱萩薄しけるかうへの露ちりて夏野にみする秋風そふく　右衛門督
八重葎しけりはてゝも草の戸の心にとちぬ跡や残らん　通
（朱注）八重葎のしけるは雑に用来候
茂りあふ夏野の草の露わけて」（34ウ）　吹もさなから秋風のこゑ　源
（朱注）夏草に風のこゑは不審に候
中に咲も有ける花を分いりて見よとやしける野への夏草　中
（朱注）風雅集の五文字の躰に候
〱玉ほこの道一筋ははらはねとしけるともなき野への夏草　竹
〱春にこそひとつ色にはもゆるとも夏千種（ママ）にわく花もかな　積
夏ふかくなりまさるらん庭もせのかきほもみえぬ露の草むら　長
（朱注）野もせ庭もせは挟の字にてせはきと云義也

夏月涼

氷室守此山本の月かけや夏をもしらぬひかりみすらん　竹
（朱注）山本とは候へとも氷室は木深き上に又かこいそへたる山なれは月見ん為はねかふ
ましき境地に候哉
なかむれは影も涼しき夕月の明るほとなきみしかよの空　長

（朱注）此五文字近代容易に不用」（35オ）

〈夏の夜も涼しかりけり天の河水よりいつる月にやあるらん　聖

〈むすふ手に（注15）涼しき影は山の井のあかてやいとゝ短夜の月　中院

手にならす扇の風に心より涼しくすめる夏の夜の月　為

（朱注）扇の風は炎熱を奪候はゝ月には涼意のなきなるへし

〈端居して更行まゝにをく霜のしろきをみれはみしか夜の月　源中納言

野夕立

〈さそひ行風より雲の浮嶋や富士のすそ野に過る夕立　右衛門督

春日野はふるともぬれし夕立の雲はみかさの山にはれても　長

（朱注）御笠は時雨も同し事なるへし

〈やとりかる野中の松の一木にも」（35ウ）そのかみしるし夕立の空（注16）　聖

（朱注）秦尉の事にや分明ならねと数一百首の内故事稀なる故に墨付候

空さゆるあられならすも音するや夕立きほふ野ちの篠原　竹

（朱注）夕立に篠の葉のさやくへき事はいかゝ候へき

家もあらは野守も出てしるへせよ俄にきほふ夕立のそら　中

（朱注）野守のしるへ夕立には不似合候哉

〈大江山遠しとみえし程もなくいく野のすゑにかゝる夕立　中院宰相中将

外山より嶺こす雲のきほひきて音のみはるゝ野への夕立　積

（朱注）義理不分明候

水辺蛍

〈思ひありと涙の川を尋てやよるはほたるのうきてもゆらん　中院

暮ぬ間は水草かくれこもり江のほたるはよるそひかりそひ行　兵

（朱注）蛍の夜光そふは勿論草かくれは夜またすとも光みゆへく候」（36オ）

〈浮草にやとりもあへす又さそふ水のまに〳〵とふほたる哉　中将

きえやらぬおもひならまし水に入なみにうかひてもゆる蛍は　竹

（朱注）蛍の水に入とは申かたく候欤

蚊遣たくかけかとみれは難波江や芦のしのやに蛍とふらん

（朱注）上句見定めて下の句にうたかひをのこしたるは如何

七夕

〈待えても一夜の程やたなはたのあふさきるさに物思ふらん　中将

たなはたの名残よさそなあふとてもまた初秋のみしか夜の空　竹

（朱注）続古今集匡房卿同類候

〈銀河なかれてはやき月も日も中にはるけきほし合の空　中将

たなはたのうき年月のへたてをも」（36ウ）あふ一夜にやうらみはるけん　積

（朱注）年のへたて七夕の契に有へからす況や月のへたて不及沙汰

聞荻

〻心なきあまのたもともいかはかり秋風しほるいせの浜荻　中将
覚にけり夢の内にも荻のはのそよと聞つる音はのこりて　通
（朱注）風躰よろしからす候
見しはみな残らぬ夢の浮はしにひとり夜わたる荻の上かせ　積
（朱注）五文字ことかはり弁かたく候
〻夕暮と何かはいひしね覚する枕にも又荻の上かせ　右衛門督

薄露

〻物おもふ身はならはしの夕より尾花か袖も露そあまれる　積
乱あひてなひく尾花は末はとも」（37オ）下葉わかれぬ庭の朝露　永
（朱注）薄に末はと詠し候哉
白露になひく尾花の打みたれ思はぬかたに浪やたつらん　長
（朱注）浪は一句の意趣各別に成候欤
〻秋にたへぬ夕もさそなつゝむともあまる尾花か袖の上の露　右衛門督
（朱注）五文字あまりても此等は深く耳に立まては聞えす候欤但秋となくてもたえさらん
とをきてはいかゝ候へき
置とならは尾花か袖にあまるとも乱れなはてそ野への夕露　源
（朱注）未来記ふりにて候
植をきし一村すゝき色〳〵の花にをとらぬ露やしけらん　聖

（朱注）本歌は二句の上三四字是をゆるすとは申候へ共位ある詞をはおかしかたく候

秋田

心なくかるてもさすか惜からん霜をく比の秋のわさ田は　竹

（朱注）人丸の霜はをくともといへるは有増こと也わさ田の頃霜のをくことかつてあるましきを

入日さす稲葉の雲のたえまよりかつふき出す秋の夕風　聖

（朱注）四の句風雅ならす」（37ウ）

〻春秋の花もおもはぬ山かつは稲葉色こき盛をやみる　右衛門督

〻かるまゝにもらぬ田面もおのつから小鹿の声のとをさかりゆく　中将

秋更てひろふおちほと打むれてなれも田つらのさをしかの声　元

（朱注）さをしかもおちほひろふやうに聞なされ候

雨夜虫

〻夜はもやゝ更行秋のきり〳〵す身にしむ雨とねにや鳴らん　長

秋の雨のなかき夜すから袖に又涙ふりそふすゝむしの声　通

（朱注）何ゆへの涙とも聞えす候

ふくる夜にたれを待てか降雨の露のまに〳〵なく虫の声　持

（朱注）露は置も葉のほるも晴天の時にかきるもの也くもる夜は露のをく事なし是にて分別有へし

そことなく枕に近き虫のねも」（38オ）　ねところまとふ夜半の村雨　積

（朱注）枕に近くはそことなき道理なし虫のねところもうちまかせたるにや

月契秋

いつとてもかけやはつゝむ空の月いかに契りて秋を分らん　聖

（朱注）影をつゝむといふ事みゝなれす候

〻あはれ身の秋いくめくり月になれ月もなれてかちきりきぬらん　右衛門督

〻月よ（ママ）ちきりたかふな秋といへは一よも千夜のひかりそふとて　竹

〻神代よりかくすめるをや月も秋秋も月とそ契り置けん　積

すみのほる月のかつらの追風に秋もかはらぬ光そふらし　永

（朱注）その理たしかならす

滝月」（38ウ）

〻落滝つ清きなかれを求きて月の御舟の影うかふらん　中将

照月にさらすとやみん布引のよるひるわかぬ滝の白糸　長

（朱注）月の題に昼のさたいかゝ

白妙の月かけなから水わけて山の滝つせみゆるひとすち　積

（朱注）一すちなととめ候事連歌にはさもや候らん

つらぬきて月さへ落る光かな浪のしら玉滝のしら糸　聖

（朱注）日をつらぬくとあれは月をもいふへきとをさくられけるにや

〈かけは今音羽の滝になかれきて関のこなたに月かたふきぬ　中将
諸ともになかれもやらて月影はみをさかのほる滝のみなかみ　竹
（朱注）此句法例文のやうなれと用来候上は咎なく候

擣衣」（39オ）

〈遠近にうつ音す也から衣たか袂より夜寒そふらん　聖
吹落て今はた寒し山里はきぬたにかよふ嶺の松かせ　元
（朱注）上句有へく候哉下句すてかたく候
哀とは誰きかさらん幽かなる草の庵に衣うつ（声欠）おと　中
（朱注）連歌に候は音宜候歌の時うつ音と留候事いやしく候と祖父誠申き
〈待わふる人の為なるから衣うつ夜は秋の風そ身にしむ　中将
（朱注）征夷の為の砧とおほしく候

菊久馥

〈露にひらけ霜にうつりて白菊の秋をつくして花そにほへる　元
〈散うせぬかけに千とせもにほはなん松をためしの庭のしら菊　右衛門督
〈咲しよりうつろふまてに色みせて」（39ウ）紅にほふしら菊のはな　為満
〈霜八度置ての後も老せぬやにほひにあまるませの白菊（花欠秋欠）
百草はかれにし跡に（注17）咲残る匂ひいくよそ庭のしら菊
（朱注）百花の枯し跡を申さは幾世の詞不相応にほひの不尽候を久しき心不分明候哉

黄葉百葉の紅葉は大略黄葉と書ける哉然者常のもみちを詠せんに咎有へきにあらす但作意の所好に随る黄の字に心を付へきも其寄あるもの乎

露霜にいくしほ染て朝な〳〵色猶そふる峯のもみち葉　為

（朱注）猶色そふと有へきを顕例のてにをはいましめ有事にや詞の字をくはへて下に用る事連綿也色も猶色は猶霜もまたひぬの類是也

〵露時雨ふりかはりても柞原下染なから色やくちまし　積

梢まていたりいたらぬ露霜をはゝそに分て紅葉しにけり　元

（朱注）（「紅葉しにけり」に）此詞近代用捨のよし申欤」（40オ）

〵千入にもかへてそおもふ紅葉□（虫損）の梢にうすき色（程欤）しちらねは　右衛門督

初冬

冬のくるまきの葉かつら秋風にちりおくれしや又誘ふらん　聖

（朱注）まさきのかつらにさるへくは申かへてもさせるめつらしけなく候欤

〵山のはも冬こもりしていつしかに秋みし雲の色ものこらす　竹

あたゝかに春日わするゝ面かけの空にかよひてたつ神無月　元

（朱注）神無月立といふ事無才覚候

昨日まて稲葉そよめく秋風も今朝は嵐の冬そきにける　長

（朱注）そよめくといふ詞きゝよろしからす候

時雨

〵定なき名には立ても村時雨時をたかへぬ冬の空かな　竹」（40ウ）

〻風さそふ時雨にそよく竹のはも幾たひ窓のはれくもるらん　右衛門督

〻木からしの音する松の下かけはしくれし跡も又時雨けり　永孝

（朱注）（「跡も又」に）感生志候

雲風の遠山のはをみるか内に宿に音きく時雨降也　聖

（朱注）くたけたる歌さまにて候

此比は木々の紅葉もちり果て松を時雨のおり〳〵そとふ　積

（朱注）第四句慈円和尚秀歌候

松高み霜におもひしみとり猶しくるゝ後の色にみすらん　元

（朱注）半臂の句例の通屈なき詞つかひに候

寒草

〻枯残る色もさむけし雪霜にもれしこかけの草のひとむら　竹」（41オ）

〻露なからわけし千種は跡も□（虫損）色はひとつの野への冬かれ　右衛門督

〻枯のこる色とみる〳〵をく霜にしほれ果たるみちのしのはら　永孝

〻かれ残る色もはかなき浅茅生にあまりて結ふ霜の寒けさ　中将

〻みし秋の露の花野ゝ面かけは残るともなき霜の下草　源中納言

氷初結

宵の間は岩うつ浪（ねのゑ）の音立て明かた氷る谷川の水　為

（朱注）谷川に岩うつ浪はこと〳〵しく聞え候哉

すゝみつる水の水上さへまさり今朝は氷そむすひかへぬる　聖

（朱注）五文字は一首の巻頭清撰たるへく候是はあまりに優美ならす候

行水の落はによとむ谷川の」（41ウ）　そのまゝこほる峯の朝かせ　元

（朱注）峯の朝風　剰句ニ候

〻今朝よりや氷とつらんたえす行山のかけひの水もらぬまて　竹

〻春（注18）また。とけゆく池の名残かとみきははかりのかつこほりぬる（注19）　中将

冬月

さゆる夜はたゝおのつからみる人もなくてそ月は嶺にかたふく　積

（朱注）結句よろしからす候

〻くまなきを冬はくまなる影なれや餘淋しき木枯の月　中将

〻おくは先はらふにきえて衣手の露とは月の色そのこれる　中将

春秋の日数積りて花紅葉おもかはり行月のこからし　源

（朱注）一首の建立たしかならす候哉時第四句行の字不審候」（42オ）

鐘の声暁かけて有明のひかりさへ行月の下ふし　元

（朱注）寒夜の月の下ふしことはりなくては難詠候欤

木々のははみなちりはてゝさゆるよの空にくまなき月のかけ哉　為

（朱注）下句同類

冬のみそ月はくまなき花紅葉はらい尽せし木枯のもり　竹

（朱注）花紅葉を木枯の森に詠し候哉不然は如何

積雪

朝ほらけ猶ふりつみてけぬか上の雪は軒はの山も富士のね　永

（朱注）造作なるしたてにて候

葛城やたかまの峯はいかならん晴間もみえす積るしら雪　長

（朱注）千山・万壑の中に高間の峯を雪のすくれて深き所に定めんは心せはくや候へき題の心深と積と差異あるへく候

〻うす雪の夕は人もまたれしを思ひたえたるあさほらけかな　聖護院

〻あれかへる枝より雪は積りけん（42ウ）松にはのこる木かくれもなし　積善院

（朱注）濃なる躰に候

〻松かえはをのれこほれて木かけたに山としつもる庭のしら雪　竹

底にみる海松なれや枝も葉にみかくれはつる雪の白なみ（注20）　中将

〻いくへともさらにいはねにつもりこし木のこはを埋むけさのしら雪　右衛門督

鷹狩

〻はしたかの鳥にあふせの春まつや（注21）かたのにちかきあまの川なみ　中将

おほつかな鐘の音とをきはし鷹の狩はのおのゝ雪の夕くれ　持

（朱注）鐘のね作例候哉

寄月恋」（43オ）

思ふそよ空行月のめくりあはむかきりは雲のはたてなりとも　為

（朱注）雲のはたては夕日のいさよふ空を申けるにや時分の相違不審なきにあらす但家々の説まち〳〵なれは一愚の管見其恐あるか

いかにせんつらさそまさる三日月の見えて入さの山しいそけは　積

（朱注）いとまなき月のいるさと聞え候

面かけのそをたにしたふなかめ哉物いひかはす月にはあらねと　聖

（朱注）第四句近き世の秀逸おかしかたき詞に候

〳〵きぬ〳〵のその面かけはとゝまらて涙にのこるあり明の月　長治

寄雲恋

〳〵しられしな我名はまたき立雲の消かへりつゝものおもふとも　竹

したひてもかひこそなけれ横雲の嶺にわかるゝ暁のそら　持

（朱注）京極黄門秀歌候

夕より立いるかたのやますのみ」（43ウ）　またれてつらき横雲のそら　兵

（朱注）足引のやます心にかゝりてもと俊頼詠し候随分骨候へは不可然候哉

明ほのや嶺にわかるゝ横雲の消て物おもふわか身なりけり　為

（朱注）峯にわかるゝ子細右に申候證哥本哥の差別此道の肝心に候

寄山恋

ふかきその心の奥の忍ふ山しのひてかよふ道としもかな　為

（朱注）本哥大意はかりにて作意の意趣あらはれす候鸚鵡の反意の類也

思ふ中へたつる関のなかりせはたゝあふさかの山すみやせん　　為

（朱注）山すみ恋の哥には優美ならす候哉かさしをといへるも心は同しけれともやさしく候欤

〻とへかしなきかすかほなる耳なしの山をためしの心つよさも　　竹

奥ふかく分こそいらめ恋の山帰らん道はよしたとるとも　　源

（朱注）恋の山に分入んには奥迄とこそと思ふへきをかへらんは心の深くしまぬにや有けん

もれてはやうき名はかりそ立田山よはの契りはまたしらぬまに　　中」（44オ）

（朱注）またしらぬ契は本哥の心雲泥作意難測者乎

もらさしと忍ふの山に入し身も色にはつゐに出ぬ物かは　　積

（朱注）忍ふ山の麓近代の作意なれは本哥にとり用へからす

寄河恋

〻おもひ川おもひにしつむ身は終にすゑはあふせの有世なりとも　　竹

身の上におもひなしてよいもせ川なかれてたえぬ末の契りを　　永

（朱注）一二句をろかにて恋の本意を失なひ候

〻色みえは千入とおもひそめ川にたつあた浪はいふかひもなし　　中将

寄門恋

〻人しれぬ契はいかて恨みまし我かよひちの門させりとも　竹

〻門よりもえも入やらて忍ふれは道にしあらぬ道もとむ也　聖護院」（44ウ）

うきにのみ立て見居てみ槙の戸をおし明かたの袖しほるなり　為

（朱注）従門帰恋を真木の戸と詠し候其作例候哉但それは自然の事なるへし寄戸恋のまきれあれは門はかと可然よし申候

寄床恋

〻契をきて（注22）衣かたしきまてといはゝふすゐの床も枕からまし　准后

（朱注）くへきよひの必定ならはふすゐの床はかりかたかるへし

〻きぬ〳〵を又こんまてと頼むまにちりにむもるゝ床のさむしろ　永孝

身もしつむ渕（うみ欠）とやならん独ねの床につきせぬ涙とをしれ　長

（朱注）床の渕打不任候

寄草恋

露になひくその神山の草の名もおもへはつらしあふひならねと　為

（朱注）西行か風になひく句法候哉五文字を餘す事誠に好まさるよしに候

〻草もけに秋はいろ〳〵の花こゝろうつろひやすき」（45オ）中そかひなき　竹

〻誰かなを（名欠）つけ初ぬらん忘れ草おもふあたりはねをもたえなん（て欠）　長治

なとてかく浅きえにしそいたつらに忘草おふる中となりけん（ゆく欠）　永

（朱注）そといひてけんとは申かたく候哉

おほつかなたか名残よとをき初て深くなり行道芝の露　元

（朱注）草に別名を詠する事本意ならす候況や道芝なとは題に相應候はぬ哉

〻茂り行人の心のわすれ草われにはわくるねさしもやなき　右衛門督

寄木恋

よしやさは朽もはてゝよ哀ともしられぬ身こそ谷の埋木　聖

（朱注）述懐の哥にまかふへく候欤

人心ひかてもつゐに埋木の谷にくちぬる身の契り哉　積

（朱注）てにをは参差候哉

よの人につゝむ心は埋木の」（45ウ）いつかことはの花もさかなん

（朱注）なんと候へはてにをはたかひ候

〻人心よそにひかれていたつらに我や杣木のあとの山もり　中将

程〳〵の情はかけよ谷かけの埋木たにも花さけるよに　竹

（朱注）むもれ木の花本説候けるやらん

寄車恋

けふのみのおもひそまさる見すもあらすみもせぬ人の小車の内　竹

（朱注）結句連哥めき候

〻恋すてふおもひの家にしつむみもよしや車のわれからにして　積

〻小夜更て音もとゝろく小車に忍ふる道のかひやなからん　右衛門督

めくりあふも一よはつらし小車の錦の紐のとけも果すは　通

（朱注）錦の小車は後を申候哉然は車の正体にあらす候作例は定てありもや候らんされと本意ならす候欤」（46オ）

寄鏡恋

〻むかふことうらなくなれる物ならは人にかゝみをかけて見ましや　積

忘れては鏡を見ても歎きあまり我かけにさへ打かたりつゝ　聖

（朱注）つゝと留る詞は唯の字にてなからと云義也然はいひ残して卅一字の餘情此一字にこもるこれによりて大旨の秀逸にはゆるし用事なし深〻斟酌可有欤

面影の残るをそれとみるたひにあらぬおもひのますかゝみ哉　源

（朱注）鏡の内にかけの残らん事信しかたく源氏物語にもかけたにとまる物ならはといへり

〻うきかけのむかへはくもる涙より鏡もわれをいとふとやみん　中将

暁寝覚

こしかたも思ひ出れは暁の夢おとろかす鐘の声〻　長

（朱注）こし方をおもふは夢の後なるへし万端参差に似たり作者の哀楽はかりかたけれは一令添削有其憚

鳥かねにおとろかされて中絶ぬ」（46ウ）　あとはきのふの夢のうき橋　中

（朱注）上の句おもひ所あるやうに候

衣手は露けかりけりおきもせすねもせて夢のさむる枕に　　為

（朱注）二句猶琢磨あるへく候哉

〱鐘の音を暁ことに聞なれておとろかぬさへ夢はさめけり（注23）　　中将

〱夢さそふかねのみたけのおのつからそその暁にすむこゝろかな　　右衛門督

夢もさめ心もすめる月かけにはや暁の空もしられし　　源

（朱注）趣向分明ならす候

忘れすもねさめせよとや鐘の聲鳥も八声のあかつきの空　　持

（朱注）暁の材木おほくとりこみ候て哥の詮すくなく候哉

山家

〱住わひて尋入にしかくれ家も猶うき時はおく山もかな　　為満

（朱注）いつち行らんといへる證勢と覚しく候」（47オ）

山ふかみ草の庵は冬かれて宿りあらはに見ゆる竹垣　　持

（朱注）いほりと云は居所もなき冬かれと覚しくてよむ人なきに似たり鎖は門戸なれは竹垣に相応すへく候

〱おのつから岩行水も砌にて柴引かこふ山のしたかけ　　准后

住なれてさひしさしらぬ山里もさすか夕は人そまたるゝ　　竹

（朱注）山里にて夕は友の帰るへき時分に候を待へき事いかゝ候へき末の集にさらてたに夕は物のかなしきにとふ人かへる岩のかけ道其證拠分明に候

世の外は爰そとおもひつくは山は山のおくにむすふかり庵　伊（私に中山欠）

（朱注）つくは山にかりほのさた証歌候哉

浦舩

〻ともし火の明石の浦を行舟（こく）のなみ（や）にくもらぬゆきゝなるらん（注24）　持明院中納言

（朱注）此風はいか□（虫損）故に吹候やらん

浦人や恨なからもこき出てあととをさかるおきの友舟　為

（朱注）此恨何事の遺恨に候哉

明石かた嶋かくれ行詠めまて」（47ウ）　昔にかへるなみのうへの舟　兵

（朱注）浪の上の月といへるにはかはりて舟は道理なく候哉

〻舟人に身を（し）あひかへ（な欠）はあくまてに漕とめましをしほかまのうら　准后

おのつから慰みやせん須磨の月にもなるゝ海人の釣舟　竹

（朱注）すまならすともなくさみはいつくの浦にもあるへく候如此通用の義庶幾せましき

よし先達申来候

〻絶ぬ日もありとみえつゝ田子の浦やなきたる浪に出る釣舟　中将

〻へたてこし浪のさかひは浦の名も（注25）しらぬことはをかはす舟人　元仲

旅行

〻我いて（てこ）し名残の袖もか（の欠）ゝらすはしほる野山の哀しらなん　中将

〻こしかたの便返さぬことつての筆もとりあへす行別れぬる　元仲」（48オ）

都出ていくかもあらねと逢人にことつてやらぬ便(むゑ)もそなき

（朱注）やらぬの義理凡慮不及候

故郷を跡にするかの旅なれはふしても夢にみえぬなりけり　長

（朱注）金葉時代風躰に候

〻また（注26）しらぬ行ゑ□(虫損)□(虫損)かは分てこし跡もはるけきむさしの〻原　右兵衛督

述懐

〻うき世そと思ひとりても身をかこち人をうらむる我そはかなき　竹

（朱注）珍重〳〵一唱三難

いひかはす友もなけれは山里を出てみやこに住やかへまし　持

（朱注）是は山家の題に相應すへく候

おしなへて花咲比は佗人もうきをわする〻春の山すみ　永

（朱注）是も山家とおほしく候

今年あれは又こん年も頼むまに」（48ウ）つもる月日の身をそおとろく　右兵衛督

（朱注）朱文公勧学の文眼前に候

寄松祝

おくりきぬ世に住吉の松のはのちりうせぬ色を君に契りて　源

（朱注）五文字何を送りけるにかおほつかなし

君か代の八百萬代は高砂のおのえ久しく松のみやしる　為

（朱注）尾上久しかるへき事不審

おさまれる世に住吉の松かえを君かみかきに移してやみん　永

（朱注）此うつすは久しきためしを移すの道理なるへけれは治定すへき所にて□（虫損）をやの字よろしからす候

生そはむ松に小松をならへても君にくらふる千世のなからん　通

（朱注）千代のなきよし俗難有へく候

散うせぬことはの種は君か代のかはらぬ色やすゑの松山　積

（朱注）言葉のたねを末の松山にて求めん事はいかゝ候へき

崑山之片玉

實枝　上」（49オ）

立春

御製

〱いとはやも春立けらしなにしおふ花の都のけさはかすめる　四

下とくる氷のひまの今朝みえて春うち出る池水のこゑ

（朱注）浪となくてうちいつることはり分明ならす候哉

惜みこし明日の年もあら玉の春のうつりて仰く空かな　源

（朱注）立春たしかならす候

霞

山姫の秋の錦を先たちて霞の衣世におほふらん　四

（朱注）さほ姫は春の神山ひめは秋のぬしに定をき候へと同し造化の神とは申なから霞の衣を山姫に奪はれ候事はいかゝ候へき哉

〈春秋のかはる野山のなかめをもこめて霞の色に立らん　左衛門督

面かけはいつみし夢そ明ほのゝ霞にきえて海山もなし　源

（朱注）夢の沙汰不得其意候」（49ウ）

梅

〈立ましる（注27）一本ゆへに草も木も枝より出ぬ梅かゝそする　源三位

（朱注）枝と候へは草に相應せす候

〈なへて世に咲としさける花よけに梅におよへる匂ひやはある　四辻中納言

つほむより一木の秋の紅葉をもかつさく梅の色にみすらん　左

（朱注）つほむと云詞宜からす哉つほめるなと申まきらはしてはとかむるまては有間敷候へ共古哥にはふくめるふくめるなと詠候古躰なからはさやうには今も詠へく候又梅は白きを賞候紅梅は題にむかはされは帰りて心をくれのやうに申習候

春月

〈草木まて春の恵みの色そへてかすむならひの月そわりなき　誠仁

春の月けにうれしとや餘るらんつゝむ霞の袖せまくして　四

（朱注）霞の袖のせはからんことはりきこえす候」（50オ）

小泊瀬や花の木の間をもりきつゝ移るも匂ふ袖の月かけ　左

（朱注）下句うつるもくもるに相似候

〻たかうへもかすむ空そと夜もすから春をいさめて月やすむらん　源三位

（朱注）月のすむとは理なくては春に申かたく候

〻村雲は晴ても空のかひやなき霞につゝ月のひかりは　御製

見花

けふも猶分入山の道かへてしをりも同し花のかけかな　左

（朱注）去年のしほりにひとしく聞候不可然候欤

〻香をとめて猶したへとや一枝に奥ある花の色をみすらん　源三位

〻あかすみるかきりは花の雲の上に春のさかりはいく世ふるとも　御製」（50ウ）

落花

おそくとも咲つる花のしはしなとちるにもちらぬ程はなからん　御製

〻おしむにもかくちり果ておもふをはおもはむ花のことはりもなし　四辻中納言

〻あたにちる花の白雪木の本につもるをみるもおしき色かな　誠仁

藤

〻咲そひて松の青葉もむらさきの色こき時とかゝる藤なみ　誠仁

〻池廣み棹さし遊ふ舟人の袖の色香にかゝる藤なみ　御製

（朱注）風流に候

〻下にのみはひまつはれておる枝のうへはみさほの松の藤なみ　四辻」（51オ）

〻春の色を木々に残して藤の花はひまつはれよ枝ことにみん　源三位

郭公

〻あくかれし初ねならても時鳥あたにいつるは聞も猶けん(ママ)　四辻

〻待人に心くらへのほとゝきすおもひよはらんひと聲もかな　誠仁

五月雨

花散し跡の青葉の紅にまた染かへす梅の雨哉　御製

〻行かよふ芦間の船の葉かくれも浪の底にや五月雨の比　四辻

夏引の手引の糸を打はへて猶ほしやらぬ五月雨のころ　左」（51ウ）

（朱注）上句同類候哉

滝ひゝく庭となるまて五月雨にかさなる水のこゆるいは墻　源三位

（朱注）山中一夜雨樹桟一日重泉候

納涼

〻涼しさは外に求めし閑なるこゝろの水にかかふ(ママ)秋風　左衛門督

〻咲花にいとひし風を夏衣心もかへて待ゆふへかな　源三位

（朱注）宗祇法師の発句に　花もかな嵐やとはん夏の庭と仕候心はひとつにて候へともと

かめ申にほかはす(ママ)候

〻せき入て浅き流れも涼しさは底ゐしられぬ松の下水　誠仁

初秋

〻おきもあへす一葉かうへの秋の露いつれか先に散はしめけん　源三位

（朱注）殊勝に候」（52オ）

いつのまに露をき初て朝かしは一葉かうへの秋をみすらん　四

（朱注）朝かしは説ある事に候哉

散そむる桐の一葉のそよ更に初風しるく秋やきぬらん　御

（朱注）桐の葉にそよさらの詞その縁なく候欤

秋風は松に音せて夕暮の残るあつさに端居をそする　左

（朱注）むすひ句よろしからす候

草花

〻真萩原袖もひとつの露の色を花の外にはいかゝはらはん　御

〻春ことの木末もしらし色〻に露もうつろふ秋の花野は　誠仁

〻野へはみな色の千種の露分けて尾花葛花みたれてそさく　四辻」（52ウ）

雁

花山や紅葉（の欤）の秋をみる人もおなしよにふる鴈はきにけり　源

（朱注）花山とは花山を申ならはし候哉

〻したふともしらてや行し恨まてはる〻霧間の初雁の声　誠仁

〻立かへり春の海辺を行鴈も朝の秋（月に）やすみよしのうら（はま欤）　四辻

鹿

〻たのめ置し妻やこもれる武蔵野の千種分つゝ小鹿なくなり　左

〻うき数を独やつくす棹鹿の聲の内より秋のゆふくれ　四辻

〻つれなさは何と岩木の山路にも猶つま恋のさをしかの声　誠

山月」（53オ）

雲霧も嵐の後の山たかみ塵よりいつる秋の夜の月　四

（朱注）あらし後用捨候へき由

東路の山のは出しかけなから唐かけて月やすむらん　誠

（朱注）山月にもろこしかけてみるへき事おほつかなし

秋にさそかつらやおりし仙人の山路の月の光そひけり　左

（朱注）古事にや題も不覚悟候

〻半天に光はみへて雲霧の山のは遠く月そいさよふ　御製

浦月

〻浦とをくかたふく月をやとし捨て独（をき欤）とかへる秋のしらなみ　源三位

〻関寺も心とめてや月もみん秋風すめる須磨のうら浪　御製

四の緒の浪に聞えしいにしへも入江の月にのこる面かけ　左」（53ウ）

（朱注）潯陽江は月たるへく候

〻旅ころもうら淋しくもいくよまて思ひあかしの月になれぬる　四辻

世のうさも先忘られてみる程にしはしなくさむ須磨の月かけ　誠仁

擣衣

〳〵うちしきる砧に夢は驚きて月も身にしむ夜比へにけり　御製

時雨

〳〵冬きぬと秋は明日の朝日かけ移りかはれる村しくれかな　御製

〳〵一とをりこゝにはれ行程たにもよその雲間や又時雨らん　誠仁」（54オ）

落葉

〳〵なかるゝを冬とやわかむ立田川ちらぬもうかふ山のもみちは　誠仁

（朱注）立田川の勝景眼前に候

〳〵染〳〵し木のはを水に吹ためて氷に残る秋の谷かせ　源三位

（朱注）至断候

〳〵花もかく散にし物と思ひ出て落葉にのこる風もうらめし　御製

〳〵音たてし梢によはる夜嵐のけさや落葉の下に吹（むすひし欤）らん　四辻

（朱注）斧鑿のあとなく候

〳〵梢をは風のさそひて木の本は一葉二はの秋かとそ見る　左衛門督

（朱注）木のもとに梢の句をへたてゝくるしかるましきや

雪

〳〵かけ白き真砂の上に降つみて雪より外はわく色そなき　四辻」（54ウ）

〳〵たへて住身には哀や深からし友まつ雪に宿をまかせて　源三位

忍恋

〻袖の上は忍ふもちすり分し野〻露とこたへて涙しらせし　源三位

〻よそめにはあやしとやみん幾度かせき返す袖の涙なからに　誠

通路の夜半も明行鳥のねにゆるす人めの関寺もかな　左

（朱注）第二の句あるへく候

〻もらさしの心つよきもはては身におもひよはらん袖のなみたか　四辻

不逢恋

槙柱立そふはかりなれぬともあはすは何の月日ならまし　四

（朱注）まきはしら何ゆへにたちそひ候哉不得其意候」（55オ）

〻あた浪にみるめはかりをとり添て我やあはての浦の海士人　源三位

〻逢まてと人にいつかは有明の月はつれなき空にかこたん　御製

契恋

行末の心もしらて頼むこそ我からつらき契りなりけれましし　御

（朱注）てには不審

待恋

かならすといひ慰めし末の露更ぬる夜半の袖にあまれる　四

（朱注）此末の露本哥に心たかひ候いかゝ

〻世にならふ人にとはゝや待程のつらき夕はありやなしやと　源

別恋

〱いつの世のたか衣〳〵に鳴そめて」（55ウ）　八声の鳥の名にも立らん　四辻

〱一すち（逢ことは）に絶ての後は玉の緒のこは何ゆへになをかくるらん　左衛門督

なのりをもかへてやとはん人心あひみぬ時に立かへる身は　源三位

（朱注）おもひ入たる躰

恨恋

〱人にのみうきにもあらすはては又身をしるかたにそふ恨かな　御製

さすか又おもひも捨ぬ我中や恨むる外のことの葉そなき　誠

（朱注）やといひてそとは申かたく候哉

打出むなかやあらしととはかりに露の恨みの身そきへかへる　四

（朱注）結句不可然候

ゆくりなくしはし形見に恨むるもゑにしたえすは情ならまし　左

（朱注）ゆくりなく不意の義おもはすなる事申候哉此哥にては前後参差候哉」（56オ）

暁

ふかき夜をしらて明つる関の戸は（の）鳥のそらねやおとろかしけん　誠

（朱注）函谷関を故事のまゝにて注したるやうにて作者の工夫あらはれす候諸事に渡りて（をなかすあり）

此分候

よしあしをわかぬうき身もさすか又つとむる道やあかつきの空　四

（朱注）孟子に舜の徒桀か徒といへる本文は心ふかきやうなれと哥さま風雅ならす候

〳〵空もやゝ涼しくなりぬあかつきのまとのともし火かゝけつくさん　左

（朱注）韓退か灯火やゝしたしむへしといへる面影うかひ候

〳〵くり返しうきとみしよの昔たに（注28）忍ふ枕のねさめとそなる　源

旅

〳〵草枕一よふた夜の宿りさへかはるとなれは名残そひぬる　御

〳〵こしかたを思ひやるにも旅ころもあとにへたつる海山そうき（もかな欠）（てる）　誠」（56ウ）

〳〵草莚かたしきなれてうたゝねの夢路露けきむさし野の原　左

（朱注）うたゝねむさし野に相應せす候哉

〳〵かりそめもふみならはねは旅の道移るなかめにけふはくらしつ（も欠）　四辻

〳〵うき旅の行ゑとゝめぬ東路の道のはてしもしら川のせき

祝

〳〵すくなるをあふかさらめや今も猶神代のまゝの敷嶋の道　四辻

〳〵おもふそよありとあらふる（マヽ）人ことの心のうちにおさめしる世を　御

〳〵岩清水すむもにこるも天地とわかるなかれはつきしとそ思ふ　源

（朱注）わかるなかれとは申かたく候言葉たり候はす候哉」（57オ）

擬刻辰翁批語者六十九首

實枝上

天正五年六月二十二三日之頃御題被出之七月七八日之比各詠進清書親王行方(ゆきて)同十一日被仰合點事同十三日合點返納同月十七日申出同十九日一日所写校合早」（57ウ）

詠百首和歌

春

立春

〱消あへぬ雪は高ねに残れとも春とや今朝はかすみ初らん

山霞

〱出る日の高ねははれて三笠山ふもとをこむるあさ霞かな

竹鶯

春やとき谷の戸出てうくひすの軒はの竹にいまそ鳴なる

野若菜

〱春日野のとふひの野への雪消ぬたれうちむれて若なつむらん」（58オ）

〱やかすとも猶空さえてあらち山朝立雲に淡雪そふる

行路梅

〱玉ほこの道行人の袖の香やかきねの梅の花の下かせ

梅風

〱くれなゐのこそめ梅(の)は色よりも匂ひそふかき春の夕かせ

柳露

〻浅みとり糸よりかくる春雨にをきそふ露の玉のを柳

春雨

〻若草の末葉の露にしられけり」（58ウ）　ふるともみえぬ庭の春雨

帰雁幽

故郷へ立帰るなりいつしかに春はかすみの衣かりかね

春月

我袖のなみたはかりをかこちてももとより霞む春の夜の月

寄雲花

〻雲に猶さきそひしより葛城や花も高間の山さくらかな

霞隔花

春霞たな引にけり高砂の尾上の花もみえぬはかりに

雨中花」（59オ）

春雨のけふさへふるの山さくらぬるとも花を猶や尋ねん

風前花

まきもくのひはらの嵐猶さえて梢にうとき山さくらかな

花如雪

〻雲とみる高ねの花に風過て雪かきくらすみよしの〻里

苗代

を山田の苗代水をせき入て年ゆたかなる程をみるかな

岸款冬

いはきしに咲ぬと見えて山吹の花は色にそ井手の玉川」（59ウ）

松藤

〳〵咲にけりみきはの松の藤の花なみも梢をこすと見るまて

三月尽

花鳥のわかれのみかは日数さへけふを限りとくるゝ春かな

夏

更衣

けふも猶春の名残やのこるとてかへまくおしき花染の袖

川卯花

玉川の河瀬に咲る卯花やよな〳〵月の影とみゆらん

初郭公」（60オ）

待わひし心しりてやほとゝきすわれに初ねをまつきかすらん

郭公遍

今は世にふりぬる後もほとゝきすあかぬ心になをまたれつゝ

盧橘

風かよふね覚の床に忍ふなり花たちはなは昔なからに

檐菖蒲

〱五月雨のふる屋の軒のあやめ草ふきそふれとももる板ま哉

早苗

けふも猶山田のさなへ取そめてゆたかなる代といそく頃かな」（60ウ）

五月雨

〱かきくらしふる五月雨の音羽川音にもしるし水のみかさは

夏月

〱半天の雲間にあけて夏のよの月にはいとふ山のはそなき

夏草滋

とふ人の跡もさなからみえぬまてしけりにけりな庭の夏草

蚊遣火

かやり火のけふりやしはし残るらん軒はの月のかけかすむなり

窓蛍

〱窓ちかき夜半の蛍や萩の葉に」（61オ）露より外の玉とみゆらん

夕立

〱足引の遠山鳥のおのへよりへたてゝかゝるゆふ立の雲

納涼

〻夕くれの風をまつ間のすゝしさは結ふいつみのみつからそしる

六月秋

御秡川ゆくせのなみの音更てかへるたもとにかよふ秋かせ

秋

早秋

〻いとはやも秋やきぬらん荻の葉に今朝よりかはる風の音つれ」（61ウ）

七夕契

たなはたの稀なる（注29）中の天河たえせぬことや契なるらん

深夜荻

〻軒ちかき荻の上風音ふけて結ひもはてぬ手枕の夢

水辺萩

〻浪かくる本あらの小萩枝なから錦をあらふ野路の玉河

薄似袖

〻霞分る袖かとみれは花薄まねくはかりに秋風そふく

原虫

露ふかき野原の草の蛍」（62オ）　いつまてとてか音をは鳴らん

暁鹿

ねさめする枕にちかき鹿の音やなれも妻とふたくひなるらん

雲端雁

〳〵いくつかと声にそしるき鳴雁の雲まの数はさたかならねと

秋夕

なかむれは哀そまさるいつもおなし夕なからも秋のゆふくれ

駒迎

あつまよりけふは都に相坂や山こえそむる望月の駒

嶺月

〳〵秋風にうきたつ雲はつくはねの」（62ウ）　嶺さしのほる月のかけかな

関月

〳〵秋ことにあれこそまされ月ならて不破の関屋はもる人やなき

杜月

〳〵このまもる心つくしとなりにけり月にうき田のもりの下草

磯月

〳〵雲はらふせとの塩風ふけにけりゑ嶋か磯に月そかたふく

潟月

難波潟みきはの波のよる〳〵は更行月にうら風そふく

朝霧

嵐吹山よりはれて大井川」（63オ）　霧のそこふく瀬〻のしら波

擣衣新古今雅経卿みよしの〻山の秋風小夜ふけて故郷さむく衣うつ也

みよし野の山かせさむく成にけりたれふる郷に衣うつらん

山紅葉

みるまゝに色こそかはれしくれ行あとよりそむる山の紅葉は

滝紅葉

〻みよし野〻滝のしら糸くりためて千入にそむる嶺のもみちは

暮秋

〻身にかへて猶やしたはん行秋のとまるならひのある世なりせは」（63ウ）

冬

時雨過

〻程もなく里をは過てしからきの外山をめくる村時雨かな

落葉深

〻つもれとも庭はあらしのさそはれてかきねそふかき木のはなりける

残菊

〻草の原秋みし色は霜かれて残るも淋し庭のしら菊

寒草霜

かれ残るまかきの草にをく霜や秋みし露のかたみなるらん

湊氷」（64オ）

紀の国や吹上の濱のはま風にゆらのみなとやなをこほるらん

冬月

霜ふかき庭の真砂も白妙の色をまかへてこほる月かけ

枯草

〻難波かた芦のかれはに風さえて一夜のほとに氷る浪かな

浦千鳥

〻浜千とり跡ふみつけて今も又わか名をかくるわかのうらなみ

池水鳥

〻池水のこほらぬかたそしられけるひとつみきはのをし鴨の声」（64ウ）

篠霰

〻有ま山ゆふゐる雲のさゆるより霰玉ちるいなのさゝはら

夕鷹狩

降雪のしらけか鷹を手にすへて猶かりくらすけふの御狩は

里雪

〻ふみ分てとふ人まれの山里はつもるかひなき庭のしら雪

庭雪

〻とはぬさへふかき心の色みえて跡なきけさの庭のしら雪

炭竈

〳〵すみかまの煙はかりをしるへにて」（65オ）　雪にまよはぬ小野の山もと

惜歳暮

〳〵おもほえす過つる方の日数さへ今おしまるゝ年の暮かな

恋

初恋

おもひそむる心の中にこむらさきいつしかふかき色やみゆらん

忍〻

つゐにはや色にや出ん我袖につゝむかひなき涙なりせは

不逢〻

かた糸のみたれて物を思ふかなあはぬうらみにむすほゝれつゝ」（65ウ）

祈〻

〳〵祈りこしるしもいまたなかりけりいつしか人を三輪の神杉

尋〻

〳〵いかにせんもすの草くきそれとたに行衛もしらぬ方に恋つゝ

聞〻

〳〵なからへておなしうき世にあるとのみ聞や我身のたのみなるらん

見〻

〳〵須磨の浦のみるめはかりはかひなくて塩たれ増るあまの衣手

契々

呉竹のよゝまて契ることのはに」（66オ）　心かはらぬ色やみゆらん

待恋

偽りのことの葉なから更行はまたてそみつる有明の月

逢々

〱こえてこそくるしき程もしられけれ行あふ坂の山の通路

後朝々

衣〳〵のわかれの袖にかきくらすなみたの露や今朝の玉つさ

顕々

〱もろともにつゝみし物をかひもなくたか涙よりもらし初けん」（66ウ）

偽恋

〱いつはりのある世とかねてしりなからかはる契りを何うらむらん

変々

〱吹風も峯こえて行浮雲の跡なきまてになる契りかな

稀々

〱いせのあまの網のうけ縄打はへてくる夜まれなる人に恋つゝ

久々

おなし世に猶なからへて中〳〵につらさやいとゝつもる年月

被厭々

夏引の手引のいとのいとはれて」（67オ）　心のうちは猶みたれつゝ

被忘恋

〱今はゝや我身のとかになしはてゝとはぬつらさをなけかすもかな

絶々

村雲のひま行月の（注30）たえ〳〵になりぬる中に残る面かけ

恨々

今はよし恨みもやらし中〳〵に人のこゝろのうきにつけても

雑

寝覚鶏

〱あけぬかと鳥のなくねに驚て月は夜ふかき暁のそら」（67ウ）

古寺鐘

今もなを昔なからに聞ゆ也初瀬の寺のいりあひのかね

名所松

〱浦風はふきよはれとも住吉の松にそ浪の音はのこれる

山家

〱山ふかみ軒はまちかき松のかせおとつるゝさへ淋しかりけり

田家

秋はつる門田のなるこ音絶て枕にちかきさをしかのこゑ

羇中衣

旅人の宿かり衣しほれつゝ」（68オ）　露わけわふる野路の篠はら

旅泊夢

〻舩とめて今夜はこゝにすまの浦や夢をはゆるせ浪の関守

思往事

めくりくる月日はいまたかはらねと昔になれは忍ひかねつゝ

述懐　千諸万端一首盡候難禁落涙候毎首御心詞珍重たけすかた相兼候驚愚眼候

〻世をおもふ心は人におとらねと昔に似ぬや身のおろかなる

祝言

吹風もおさまる御代のはしめとて嶋の外まて浪しつかなり」（68ウ）

五十八首　頓阿上

宝篋院殿百首御詠

康安二八二十六日被下之同二十九日加愚點令返進」（69オ）

詠三十首和歌　公條

香具山立春

雪なからけささかきはのかく山をとめて道ある春や立らん

三輪山霞

いつれとかしるしの杉も三輪の山おなしかさしに霞たつ空

春日野鶯

谷を出てうつる心や春日野の道しるへする鶯のこゑ

難波津梅

難波津やみちくる塩に梅咲て世にゝほふへき春かせそふく

吉野山桜」（70オ）

春のきて桜も雪のふる里のよしのは冬の外やなからん

志賀花園蝶

咲しより志賀の花園とひかよふ胡蝶も夢の昔をやおもふ

住江藤

住江やたえすも岸による芦の色に出たる松の藤なみ

筑波山新樹

朝露の木々のみとりもにゐはりのつくはの山は雲もかゝらす

音羽山郭公

雲埋む梢はるかにほとゝきす音羽の山の声ほのかなり」（70ウ）

遠里小野夏草

花さかむ真萩かりませ秋は又遠里小野を分るあけまき

大井川鵜舩

う舩さすかゝりの跡も大ゐ川河辺の松の打けふりゆく

篠田杜納涼

涼しさは手にむすふてふいつみなる篠田のもりのかけにくらさん

宮城野萩

萩か花そめ色なくは宮城のゝ露のかきりはいかゝさくへき

鳥羽田雁

幾秋をかけてかきけん色つくる」（71オ）　鳥羽田の稲をかりのひとつら

小倉山鹿

立ならす秋もいく夜の小倉山しかのおもひを霧のふる里

玉津嶋月

月すめはいそのまさこも玉津嶋みかくひかりは空もへたてし

須磨浦月

秋風もせき吹こえてへたてなき月をそよする須磨の浦なみ

吹上濱菊

天津星あやまつ菊の色よりや浪の吹上ににほふはまかせ

龍田川紅葉」（71ウ）

わたる瀬をいかゝさためん立田川ふかきもみちの色にまかせて

生駒山時雨

きのふけふ分て立ゐる雲やます時雨折しるいこま山かな

三嶋江寒芦

浪風にみしますかゝさかたふけは芦かり小舟入江寒けき

佐保川千鳥

ゐるたつのひとりねかたきさほ川のおもひやかはす友千鳥なく

相坂関雪

相坂は雪の色よりなき出て夕附鳥や関路もるらん」（72オ）

宇治川網代

ひをむしにあらそふ心武士のやそうち川にみるもはかなき

泊瀬山鐘

はつせ山鐘きく枕たれありてその暁にふたもとの杉

明石浦舟

夕日かけあかしの浦に嶋かくれおもひし舟のかへるをそみる

佐夜中山旅

旅衣かたらふ人を今やともさやの中山いかゝたのまん

天橋立松

久かたの天の橋立橋たてゝ」（72ウ）　をよふや松のみとりなるらん

伏見里竹

ほしかねつ涙にそめし呉竹の伏見の里をよものなこりに

和歌浦鶴

仙人の老をかへしてわかの浦やすむてふたつや君か代のため」（73オ）

春たつ日

打はへてけふあら玉の年の緒の長きを春の光りにそみる　邦高

のこりの雪

春あさき朝日かくれの山里はかきねをさむみ残るしら雪　仁悟

わかな

袖寒みにほふともなき春風の花のゝわかな雪をつむなり　実香

あをむま

春の色もみはしにしるき白馬を久しき世々のためしにそ引　宣胤

やよひ

色々の幣にかさしのふちさくら」（74オ）　南祭の日やめくるらし　堯胤

衣かへ

香をたにも猶うつ蟬のから衣かへても花のわすれかたみに　實隆

うの花

外にみぬ月もそれかと卯花のさけるをたとる木々の下道　貞敦

神まつり

神まつる卯月のはしめ一筋にそれとみ室の山かつらせり　為廣

あやめ草

茅かやふく昔の宿を忘れすはねなから軒のあやめをもみん

なこしのはらへ」（74ウ）

みたらしや浪もなこしのはらへしてかへるさ涼し水のゆふかせ　道永

はつ秋

秋風そ猶おとろかす一とせのなかはの夢も昨日とおもふに　政為

たなはた

天川いつかけそめてかさゝきのはしめとなりしあふせなるらん　道應

十五夜（モチツキ）

照そふや月も半の秋をへてなを十五夜の空そ名にたつ　覚胤

こまひき

ひく駒のいさみある世と仰つゝ昔を今にかへす袖かな

季種」（75オ）

ここぬか

千々の秋めくるもあかし九重に八重さく花の菊のさかつき　実望

神無月

秋の色のかはらすなから神無月おなし雲間や猶しくるらん　慈運

しも月

天乙女たへぬためしを更にまた昔にかへす袖のしら露　雅俊

かくら

きゝたゆる事をそなけく蛬うたひし秋のいと竹の声　季経

佛名

頼むそよ三世の仏を唱へては」（75ウ）　罪ものこらぬ年やくるらん　元長

としのはて

暮行をしたふとならはさもあらて又こんとしもまたれすはなし　俊量

あまのはら

蟬のはの袖さへたへす天の原いかにてる日のみな月の影　重治

てる日

山遠く半空晴て照る日にはさはらぬ雲の嶺たにもなし　宣秀

みか月

夕暮は槙の戸口のやすらひにさす程もなき三日月のかけ　基春

ゆふやみ」（76オ）

光もて（注30）道やたとらぬ夕暮は闇はあやなしと行蛍かな　和長

ほし

夕闇の星の林の涼しさも月まつ程のあかぬ空かな　守光

あらし

身にしめてね覚の枕聞佗ぬ松の嵐のさ夜ふかき声　公條

むらさめ

空はまたはるゝともなき村雨のまつ一とをりはや過ぬらん　賢房

しつく

み山川水上とをくきてみれは岩ねの雫木々のした露　永宣」（76ウ）

ちり

はらはてそみるへかりける床夏の花の塵なきけさのしめりは　堯胤

なる神

山遠く降も過るもなる神の音にきこゆる夕立の空　邦高

やま川

せきいるゝ庭のなかれもやかて又するゑはひとつの山川の水　当朝

いはほ

かけひたす岩ほの苔の色よりや夏なき水の碧そふらん　康親

そま

暮ぬれはそま引すてゝ行人の」（77オ）　くたす筏や月にさすらん　政為

をか

水茎の岡の葛葉の秋風にうらめつらしき露のしら玉　道永

むまや

袖もさそふりくる雨はしのつかのむまやの陰のさよふかき声　実隆

秋の田

うき秋にねぬ夜な佗そ小山田の庵もる月も心ありけり

そほつ

心たれ法にはひかんかりの世にてら田のそほつおとろかしても　為廣

春の野」（77ウ）

水草のみとりかすある春の野は朝をく露の色もわかれし　為学

大たかかり

山こゆる鳥の落草残る日のかけもすくなくかり暮しつゝ　公音

みやこ

なをさりにたれ詠らんいひしらぬ都の山の月のあけほの　実香

くに

うかひ出し淡路嶋ねや秋つすの四方に動かぬ始めなるらん　道應

ふるさと

住すてし宿はあれ行庭の面に今も音する軒の松かせ　伊長」（78オ）

かきほ

茂り行垣ほの荻に音つれてこぬ秋風そかねて涼しき　雅業

となり

三度うつす心にもしれ一事もこはあしからしとはかりの宿　宣胤

かと

月出る夕は人を松の門さしてたのめしことはなけれと　隆康

おきな

年をふるおきなか髪の白雪は哀きえせぬ物にやあるらん　覚胤

おや

おろかなるわれそかひなきたらちねの」（78ウ）　諫めしことはわすれ果ねと　季経

てら

鐘の音にありとはかりは白雲のたな引山のみねの古寺　仁悟

みつ

谷ふかみ岩間の水の音たてゝあたりの木陰露そ涼しき　言継

ゐせき

山川の下行水はせかれてもいせきを越る瀬々の岩波　慈運

しからみ

年ははや半はに近きみそき川日なみなかれてしからみもなし　俊量

やな」（79オ）

はやせ川やなこす水のわきかへりうきてなかるゝ浪の白泡　元長

にはたつみ

雨はるゝ蓬かもとの庭たつみそれかとはかりすめる月かけ　季種

うたかた

流れてもつきぬは水のうたかたのあはにむすへる滝の糸筋　雅俊

しをかま

あま人のたくもの煙立波の外にくもるや浦のしほかま　実望

こひ

忘れしの契りを人にたのめてもあはすはたへぬ恋やうからん　貞敦」（79ウ）

かたこひ

あひおもふ事やなからん世ゝまてのたへぬうらみを人にのこして　重治

おもかけ

独ねと恨ははてし我身ともそふや夜床の人の面かけ　定秀

ひとり寝

しき忍ふ人こそなけれすかこものとふしかゝふし独ねの床　為永

なみた

うき数やまつ先立て袖の上におほえすおつる涙なりけん　守光

うらみ

秋風に恨かちなる葛の葉も」（80オ）　うき身ひとつのうへとこそしれ　公條

いはひ

おきふしのいはふことはの積る数も君か千とせの今そしりぬる　和長

わかれ

したふとて立わかれすはそれそ先心にかなふ命なるへき

たひ

うかりつる道しおもへはなをさりに思ひて出し旅そくやしき　賢房

物かたり

人の上にかたりなしても哀なる思ひのぬしよたれとかはしる　実隆

むかしをこふ」（80ウ）

立かへり身のいにしへをおもふにはうきをも忍ふ世とや成らん　邦高

むかしあへる人

逢みしを今はむかしといふはかりなからへてまつ人のおとつれ　宣胤

おもひわつらふ

うつろはん言のはならは初草のうらなくとてもいかゝたのまん　基春

なき名

しらせはやなき名取川なかれても身は埋木の朽はてん世を　為廣

かくれつま

人しれぬ我はたきぬのかくれ妻いく夜かさねてあく時のあらん　実望」（81オ）

玉くしけ

我心さしてくもらぬ玉くしけ三途をはふたけとそおもふ　堯胤

もとゆひ

たれもみな君につかふる契りをや初元結にむすひこめけん　政為

しほやき衣

哀いつををのかひまとか芦の屋のなたの塩やき衣ほすらし　実香

あふき

手にならす扇に見えてこぬ秋のめにはさやかに風そ涼しき　道應

かさ

雨にきる笠はあれとも袖ぬるゝ」（81ウ）　涙に老はかくれさりけり　俊量

みの

山道は露も雫もふる雨にみのゝ袂やしほれそふらん　為学

つと

これそこの都のつとゝおもふにも月は程なき須磨の浦波　康親

くれなゐ

かさしつる花の匂ひや残るらん大宮人の袖のくれなゐ　季経

むらさき

すみれつみ真萩咲までおなしのゝ同し色にもめてきぬるかな
　みとり」（82オ）
薄くこくみとりはかはる松竹もおなし千とせや君に契らん　季種
　にしき
文にたにあひおもふ程はしられしを織や錦の道にみえぬる
　あや
秋待てをるはた物やたなはたの手にもおとらぬあやをなすらん　重治
　はなかつみ
かつみ草その名におふる沼水の浅からぬ花の色も匂ひを　為永
　さねかつら
岩かねの露をかさねてさねかつらくるしかりけるかり枕かな
　実隆」（82ウ）
　あゐ
たねはそのあゐより出て藍のはの一しほ深き色としもなし　元長
　まさき
奥山は正木移ひなく鹿の涙しくるゝころそわひしき　覚胤
　ひかけ
雨すくる夕の雲の日かけ草かけろふ露の道そ涼しき　永宣
　みくり

よそにのみ身筑(ママ)磨江のみくり縄くるしや浪の埋れこし世は　為廣

なつむし

おろかなる人の心は夏むしの」（83オ）　火にいるよるの思ひをそしる　基春

ひくらし

夕まくれ月またをそき梢より時雨て過る日くらしの声　伊長

てふ

野へみれは千種の花を吹風にならふこてふも乱てそとふ　隆康

たけ

さかへ行かけをこそまて竹の園その名も代ゝの跡をかさねて　邦高

むめ

春や今北にむかへる窓の雪匂ふとみれは梅咲にけり　公音

しゐ」（83ウ）

霜さやくしゐの葉寒き山かせにかたしく袖や色かはるらん　政為

すき

山のはに入日は残る影なから暮行色や杉のむら立　雅業

かし

霜雪の色をさなからしらかしのうらはにみせて山かせそふく　宣秀

しきみ

大原やふかき涙のさめ坂はしきみにぬれし山路とそきく　堯胤
　　からす
夏の夜のまたよひなからみる月に烏鳴たち空そ明行　言綱」（84オ）
　　かほとり
たれにつけてみよと鳴らん春日のや花のけはいのかほ鳥の声　和長
　　かさゝき
久かたの星の契にいかなれはわたしそめけんかさゝきの橋　雅俊

永正四年六月廿五日
出題政為卿

右者諸歌集より抜書早

諸歌集奥書曰

右之諸哥集者以飛鳥井
干時宰相雅章卿本書寫
之早尤可為證本者也」（84ウ）
正保三年仲夏書之

享保十二年蔦月七日書寫終
時中庵

元啓

公迪（花押）」（85オ）

注1　「なとめつらしき」を朱でミセケチして「そふ色香かな」とす。
注2　「申候勅」の「候」にミセケチあり。
注3　「すむ月にねられぬ床の浦人や浪のよるさへもしほくむらん」を訂す。
注4　「いかなれは見しをちきりにかくはかり何おもかけの身にとまるらん」を訂す。
注5　「花の色もあたくらへして日影まつ垣ねの露に消る朝かほ」を訂す。
注6　「の日」の「の」にミセケチあり。
注7　「ならん」をミセケチして「の戸の」とす。
注8　「也」をミセケチして「なり」とす。
注9　「神もいかゝとゝめん」の「いかゝ」を朱でミセケチし「もみちはを」のあとに朱で「いかて」を補う。「とゝめん」の「ん」を朱でミセケチして「ぬ」とす。
注10　注9と同じように添削。
注11　「きこえぬたき」の「ぬ」をミセケチして「か」とす。
注12　「尋ぬうちに」の「に」をミセケチして「は」とす。
注13　「行なり」の「な」をミセケチして「け」とす。

注14　「花の」の「の」をミセケチして「も」とす。
注15　「むすふ手の」の「の」をミセケチして「に」とす。
注16　「雨」を消して「空」と傍書。
注17　「後に」をミセケチして「跡に」とす。
注18　「今朝」を訂して「春」とす。
注19　「行」を訂して「ぬる」とす。
注20　「底にみる海松なれや枝も葉もふかくかけたる雪の白なみ」を訂す。
注21　「や頼むらん」をミセケチして「の春まつや」とす。
注22　「こぬまても」をミセケチして「契をきて」とす。
注23　下句「おとろかされぬ夢もさめけり」を訂す。
注24　「すかせや吹」をミセケチして「ぬゆきゝなる」とす。
注25　「浦の名の」の「の」をミセケチして「も」とす。
注26　「いさ」をミセケチして「また」とす。
注27　「立ましり」の「り」をミセケチして「る」とす。
注28　「昔さへ」の「さへ」をミセケチして「たに」とす。
注29　「稀のる」の「の」をミセケチして「稀なる」とす。
注30　「こま」をミセケチして「月」とす。
注31　「光もや」の「や」をミセケチして「て」とす。